

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十五年二月二十五日 印刷
昭和四十五年三月一日発行 (毎月一日発行)
(第五十四号)



No. 54

三月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本 盛



超特撰 (化粧ケース入) 一、ハリットル詰・一、四一〇円

酒 日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

情報整理

些か説教じみた長命保健の話にふれ先月号に一病息災を書いた途端、正月八日本社の新年句会を終って帰宅後、夕食の中頃から熱発に気付く。8度3分。こいつは香港風邪とやらではないかと床にもぐり込んだがもう遅い。高い熱、はげしい咳、血痰まで出る騒ぎに腰は砕ける程痛む。肺炎で死ぬのかなとちりり思う。三十余年前の肺炎では九死に一生婆婆に帰れた経験もある。やっと半人前位に恢復したがその喜びより驚いた事は、僅か二週間病臥中枕頭に出来た印刷物の山である。

勿論注文した分もあるが日刊新聞、ダイレクトメール等本職の勉強に必要な書籍以外に何とおびただしい風景だろう。情報時代PR時代とは言いつら上手に読む選別整理が如何に難しいかきびしく肝に銘じた。マスコミとは何か、そしてその対応策は。病中閑がいろいろ教えてくれた。ハナ肇氏が麻雀をやり乍ら何の気もなく発した言葉と言われる「アツと驚く為五郎」をそのまま地で行くより手はないだろうか。

妙薬はない安静になされませ

九死に一生と迄はゆかぬが死にそこね

ほろ酔で豆まく俺の年男

流感もなおって豆まき念を入れ

福にまぎれ鬼も時時やって来い

庵々生島中



月号三塔柳川

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

情報整理―句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

歌まつり……………八木摩太郎…(2)

川柳初篇研究……………(八十一)……………(20)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄
川端 柳風・故高須亜三味・丸 十府・岡田 甫

九輪抄……………清水白柳選…(26)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………若本多久志…(24)

(近作柳梅)

……………菊沢小松園…(25)

中国の霊薬……………(大陸巷談)……………東野 大八…(22)

川柳徳川記……………(十二)……………富士野鞍馬…(44)

つらつら思ふ……………高鷺 亜鈍…(54)

ふる里の

歌まつり

―ステージの思い出

八木摩太郎

百万都市をめざして発展しつつある堺の姿、その開発の影に見えかなく押しつぶされる「古き堺のよさ」に、やり切れぬ怒りの庶民の抵抗文学、異色の川柳集――生きた堺の案内記と云われた私の本――「堺の川柳散歩・堺古今詩藻集」が、市当局の目にとまり、堺市・NHK主催の「ふるさとの歌まつり」に、堺の石つき唄が取り上げられ出場して呉れとの話。

石つき唄は、京の着だおれ、大阪の食いだおれ、堺の建てだおれの言葉通り、家の建築の際の基礎の石をつく時の唄、古い唄で、僕らも子供時分唄ったが今は知る人も皆無で一町や二町三町知ってい

★ 編集後記	あ あ 梅志さん	清水白柳・橘高薫風・不二田一三夫	(38)
	梅志さんのこと	東野 大八	(42)
	近 作 柳 樽	菊沢小松園選	(30)
	外来語と日本語	戸田 古方	(23)
	きのう きょう	本多 柳志	(49)
	初 歩 教 室	本田恵二郎	(48)
	猫と暮らして二カ月	松川 杜 的	(43)
	大 萬 川 柳 「国旗」	清水白柳選	(50)
	☆ 柳 界 展 望	(薫 風)	(52)
	☆ 本社二月中旬会	(庸 佐)	(55)
	☆ 各 地 柳 壇	(文 秋)	(58)
	一 路 集 「叱 る」	桜川 不水選	(46)
	「パ ン」	山川 阿茶選	(46)
	「土曜日」	小西 無鬼選	(47)
		(一三夫)	(65)

る位で風前の灯、滅失寸前、今に書き残さねばと思って書いた。

堺は旧市二十四町、自由市の遺物、土居川の濠に廻らされ、町の名は、「ん」がついて発音される堺のまち名をいおうなら

松のないのに並松町

半町旅籠で一町半

咲いた花ならさくらん町

以下略。

柳ン町、九間ン町、車ン町、ゆやン町と「ん」がつくが特長であるNHKの名司会宮田氏は堺の先覚者明治三十年秘境チベット入りして仏典や数々の民族資料を持帰って多大の業績を残した河口慧海師と縁類、堺ゆかりの方であるとか聞いて一層親近感を覚え全国に流れるテレビでも楽な気対話した。

これも川柳披露が役立ったのかも知れない。宮田氏に川柳雅号で呼ばれ今後も堺のために精進をと挨拶され、堺市長さんからも、ご苦労と握手を求められたのも一生の思い出になりそう。

摩太郎の背の高さも見て貰い



中島生々庵選

大阪市 酒田清子

帰る気へおせち料理を届けられ

チャンネルのどこまわしても歌謡曲

世代の差歩調合わせばくたびれる

日々好日このまま足踏みして居たい

感情の整理終れば朝となり

倉敷市 本田恵二朗

熱燭で直る病と妻は知り

悪酔いの尾羽打ち枯れたていたらく

伝説をブルドーザーが削り取り

長いものに巻かれまいとするあせり

午さがり往診さまと碁を囲み

岸和田市 内藤宜左子

ゴミ箱はフタだけふいて新春になり

真新らの下着で旅のたのしけれ

機転きく嫁だと酒の好きな客

バンザイが済んで初荷はまだ待たせ

うっかりと触れても風鈴冬の音

門真市 福島鉄児

女性上位時代の上へあぐらかき

えらそうに云うても女米をとぎ

かんじんなところは男にまかせとき

焼け落ちる棟へ野次馬声をあげ

ドラマ佳境煙草の灰が落ちまっせ

諫早市 川岡靈眼子

三十寡婦良縁だったとは可笑し

拇印でもよいかと仲の良い保証

節くれた指に熱燭ぶらさがり

両陛下下拝む明治の老の幸
譲るもの譲って粗末に扱われ

兵庫県 遠山可住

系図握りしめて旧道の門構え

一本の道へ親子でまだ歩き

としよりが居て乾柿が干しあがり

ライバルの先手バシツと音をたて

好きなことさせてあげたと見放され

高槻市 傍島静馬

その他大せい中の一人になっていた

饗鏢を誇る入れ歯をがたつかせ

北風が不言実行にぶらせる

ほどほどに降って雪見の酒うまし

掃除機のおとを母親掃きたがり

大阪市 正本水客

大徳寺界隈

粉雪に薄陽して冬の詩が見える

鉄鉢料理うつわ重ねて楽しみぬ

薄氷して水蓮のうごかずに

一秒の合掌 自分の仏がみえてくる

冬の空そのままにして池氷る

大阪市 金井文秋

豊作へ米を食べない人が増え

凝りはぐす程は叩いてくれぬ孫
奥さんが儲けてるので気前よし
いい方に感違いされ黙っとく
せてものの救い借金なしで死に

伊丹市 小川静観堂

水菜買うて七草粥をすませとき

礼状早よ書かな北海のイクラたべてもた

一年を三日で暮す恵比須顔

木も草もみんな静かに霜光る

難聴へテレビは怒ったような顔

大阪市 橘高薫風

妻病めば

点滴の血のみ暖色 手術室

手術なお交響楽が鳴りつつけ

紅薔薇は壺に剩れど血の足らぬ

呼吸つめていのちを合わす久しぶり

クリスマス 祈れるものは祈りおり

青森市 工藤甲吉

人間の不浄を叱る雪の峯

セールの冬のある日はこごえかけ

雪しんしんひとり沖縄など思い

ご用納めなどと役人勝手過ぎ

エノケンに死なれお茶の間がっかりし

岡山県 直原七面山

出る幕でなし妻の客

蔵で欠伸をする鎧

のれん支える向う鉢巻

盃を手に恋の思惑

愛の形見の肌の菌型よ

出雲市

王

紫

怒号とも哀訴とも見ゆ冬の濤

未だ過去とならぬ傷心打ち明けず

贅沢とみるか詩人の孤独癖

何色に塗ろう定退後の余白

生と死の隙間を縫うに言葉あり

岡山県

浜田久米雄

ついにやって来た六十の誕生日

カラー写真俺をよっぽど古く撮り

電気代嵩んだ冬を持ちこたえ

何カ月ぶりのパーマへ妻出かけ

腰浮かしつつ年寄りの話聞く

大阪市

本多柳志

再会の名刺へ眼鏡かけ更える

寝正月松竹梅のつやも褪せ

孫達の拍手の中のもちが焦げ

粉骨碎身約束したのが落選し

有り余るドルと米とへ住みにくし

豊中市

戸田古方

妻と夫起きる時間がずればはじめ

空くじになつて福引ハハハのハ

そのときに手近に数珠のみつからず

初風呂でつせと寒さ気にならず

どんな初夢見るつもり竹筆の宝船

倉敷市

野田素身郎

この歳になつても忘れられない人一人

頬がつくほど寄り添うてから撮らし

休みとは知らずいつもの店という電話

年賀状この一枚がほしかった

言わんでもいいのに月賦よと晴着

京都市

松川杜的

年頭吟

追ひ羽根が比叡の雪を引き寄せる

赤字線に勤め悔なしズック靴

背伸びすまいあぐらかくまい初日の出

和服着て妻もお琴へ久し振り

成長の子の字がうれし祝箸

大阪府 大坂形水

ホラ吹き男がえらい奴になり
怒らない相手はとほと持て余す
この辺を歩きたいのに見送られ
ゴルフのくせに地下段息が切れ
戦争のニュースそんな国あったのか

大阪府 中川滋雀

豪語した手前空しい肩を張り
謹んで初春を寿ぐなぐり書き
突返す歳暮にしては重すぎる
昇らねばならぬ階段まだ続く

岡山県 荻野鮫虎狼

お元日相手が欲しい訪問着
本当の涙は腹の中へ落ち
うちの子が走る時だけ旗を振り
地球儀へ日本がしがみついて居り

倉敷市 水粉千翁

未来への炎大きな初日の出
ことさらにまた明けましておめでとう
神仏の加護寝転んで見失い
さびしさが美しすぎて近寄れず

竹原市 山内静水

雪こんこん犬の鎖を解いてやろ
子宝に恵まれ貯金も借りもない
引越して来た天井にある御札
家計簿とべつ女房の太っ腹

広島県 高橋鬼焼

飲めぬのが一人へ妻は気をつかい
母さんが笑った僕も笑おうか
反対はすまい妻には好きな柄
笑顔みな使い果して夜をかえる

堺市 高橋千万子

ダイヤルを中途で止めて恋終る
無言でも指先だけは動いてた
三カ日家計簿白のままめくる
拾うて来た小犬をすてる場所がない

愛媛県 村上旭童

飲んでねる外に用なき山の雪
雪なんぼ降っても川の水流る
余生にはふれまいとする苗を植え
四十には四十に似合う女が来

小松市 馬場魚山

差し迫った病いでもなく手遅れる
退屈のできる病氣感謝する

退院をしても停年待ち構え
全快でない退院はしめり勝ち

笠岡市 松本忠三

宴会の幹事帰宅してからご飯
定まってるくせに形式的に会議
身構えた途端に薪が倒れかけ
暮のうち届けますよがこの始末

高槻市 若柳潮花

白椿茶室の床に春うごく
静海波春一番の顔で舞い
振袖を着たら娘のひざになり
生活のかかる扇へ飾る餅

堺市 伏見茂美

お正月

一本の酒空ける日を妻と賭け
盃を素直に受けて妻も酔い
とそきげん犬心得て行くコース

叔父死去

宗教の隔てがとれた手を合わせ

藤井寺市 西 いわを

怒り持つことも忘れず進まんか
一片のメモが事件を新らたにし

泥水に育った蓮の上に仏
頂上が見えたと主治医が仰せられ

鹿児島市 土岐トク子

宝石のような憶い出繰る日記
目かくしをされた振袖遠い夢
出稼ぎの肩に過労と云う土産
明暗を背負って新築仰ぎ見る

神戸市 仲 どんたく

百八つ一年の垢流しつつ
告別の人賑ぎ賑ぎし天寿の死
旅終えて茶漬一ぱい食って寝る
これでもう売切れました二女嫁ぐ

松江市 小林孤呂二

しばらくの女上位だ逆らわず
落葉のリズムへとまどう竹ぼうき
流感の妻へ火かげん味かげん
一割減反食うに困らぬからいえる

笠岡市 木山遠二

男一疋ニコニコばかりもして居れず
もうぼけましたを謙遜と見てくれず

食道楽

そばがきに明治生れの胃の機嫌

特級をはずんでフグを賞味する

八尾市 高杉 鬼遊

空っぽの銚子が先に寝転がり

平和主義軍鶏が言うから信じない

水滴の円みに空が嵌めこまれ

たかが歩と思えど恐い金である

下関市 石川 侃流洞

いい養子来て生き甲斐をふれ歩き

ボンコツの排気苦しい上り坂

鶏悲し産まねばならぬ無精卵

まだダシにされる怒りをぐっと吞む

笠岡市 出原 真奇

娘等と旅ちよっぴり若いタイをしめ

ともかくも五十年生きた酒の味

バン声の軍歌ヘスキヤキにえつまり

医者目の目が死期のせまった顔となり

松江市 中川 晃男

雪匂うばかりに里の初春が明け

維持費にも困る史跡の指定受け

寝押しするズボンへ願う明日の幸

美しくやさしく言っても嘘は嘘

京都市 都倉 求芽

忘れられた金魚冬を越す意気地

コンピューターたまには味な答えもし

銭湯へ行くだけの下駄一生履けるらし

螢光灯手探ぐりで用済む頃に灯き

大阪市 福井 野迷路

野良犬の誇り鎖の音がない

ぼけテレビ並みに頭どついてみ

無防備と何でも反対で総くずれ

青い鳥求め続けて七十九

兵庫県 河原 みのる

判コ押すこと賀状でも心地よし

もて余す物の一つにカレンダー

万博建設見学旅行(二句)

あとで図を見れば端っばに立っただけ

人類の未来斯くやと用荒れ

倉敷市 小幡 里風

真相をたぐれば名士顔を出し

反対とはつきり言える君が好き

沈黙の中で見つけた妥協点

孤独なおつるの神様信じる日

倉敷市 木村 千容

雪花が散りちり窓を覗くなり

日々新七〇年へ総けつき

脚下の砂が崩れて大あわて

昨日の今日であつてはならぬ

鳥取市 清水一保

氏神へ無沙汰を詫びる初詣

人生のドラマへ七十年が明け

黙々と降つて豪雪恐れられ

町議選に立候補決意して

明日からは我が身を裁く町の声

岡山県 浜野奇童

へき地勤務三年（三句）

三年目あすの天気がわかりかけ

空びんがこんなになたまっていた下宿

出張のメモ買い出しに行く如し

六・三・三がこんな大学生を生み

美禰市 安平次弘道

鳩ポッポ鳩になりきる幼児の世界

出稼ぎが帰る春の陽やわらかい

世間態気にする愛に嘘があり

親の愛一人占めしてコンマ以下

大阪市 石倉旅風

履物をそのひとらしい型で脱ぎ

病棟賦

治らずに出てゆくひとに声をかけ

首肯いて聞いて下手には慰めず

病人としてより見ない婦長以下

高槻市 福田丁路

厄払いしたかのように云われる死

親の云うことは古いと思ひこみ

草に寝て土筆と鼻を突き合わせ

春浅き朝の散歩で轢かれかけ

大阪市 神谷凡九郎

なんであんななかと とうとう二十年

生きて行くその宿命が争そわせ

自給自足の原始よ文化を嫌悪をする

十七才のママで選挙権がない

高槻市 山田季賛

奥の手があるから雀はだまり込み

出世は出来ぬがまああの今日を生き

鳥籠の小鳥正月をあっけなし

祝酒まわり音痴の唄が出る

岡山県 出原敬一

ぬかるみに喘ぎつ生きる松葉杖

笹根掘る青年の息夢えがく

退屈な牛が見ている雪景色
真実を言えば崩れてゆく絆

八尾市 香川 醉々

甲子園寒の雀が遊ぶ場所

残り火を抱え授業を再開し

庶民とはわれら古米を買わされる

権力の座へお祝いの鯛供え

大阪市 有信 新之助

ええ場所を見つけた易者の灯が温い

このネオンすっかり消えた夜が見たい

座ぶとんが足りない会の笑い声

貧弱な矢印群衆まどわせる

富田林市 岩田 美代

日々好日そんな味する茶をよばれ

倅せの論理判った顔しとく

逆流へ棹さす若さを只拍手

初孫誕生

新春一番顔中口に呱呱の声

下関市 桜川 不水

狸寝のあくびで覚めてふてぶてし

裏山はまだ雪なのに落の臺

百坪へ自給自足の汗がしみ

あの美人未婚とあってさぐり入れ

明石市 阿万万 的

奈良奥山から柳生街道へ

石仏の石の乾きを冬と呼ぶ

黒だけの濃淡原生林は冬

南紀白浜に旅して

墓地移転見事な温泉ビルが建ち

単調な音だよ高架走る貨車

米子市 八木 千代

運だけで築いたように羨まれ

人並という幸運に春を足る

端役でも夢はわたしの出場をくれ

スタートの無理いつまでもついでくる

倉吉市 奥谷 弘朗

大山の望める窓がお気に召し

一年を妻の笑顔で励まされ

塞翁の馬をコンピュータが消し

すぐ顔に出すので軽くあしらわれ

大阪市 西出 一栄

除夜の鐘六十七になり申し

ご祝儀の用意も出来て初招待つ

お正月蒸発しとうなる本家

嫁三十三の厄

七色を祝うて厄など気にしなや

和歌山市 野村太茂津

子等帰省テンボがくるう松の内

同窓会どんぐりだけが集まった

廻り道つかんだ幸を放すまい

ラッシュから逃げ出し宿は静か過ぎ

熊本市 有働芳仙

捨てて来た犬へ眠れぬ雪となる

掛声も揃い初荷の豆しほり

コンパクト閉じてノックへ身がまえる

三面鏡本当の顔は泣いている

大阪市 山川阿茶

冬支度小屋の主へかけす鳴く

かくし芸 通は茶利舞一寸だけ

初風呂の誰れも頭を洗うてず

ギブエンドテイクでは神でなし

愛媛県 渡辺曉童

定職をもつ足どりで街を行く

待ち呆けて車の事故でもないやろか

ききもせぬのに子の自慢とめどなく

値切らぬにまけてくれたで恩にきる

堺市 吉田圭井堂

常識にあとは任すと説くルール

貰うたとも貰われたとも言わぬだけ

旧友急逝す

クラス会またも法事に切り替わる

盆栽が友のかたみの百カ日

竹原市 森井菁居

川砂のあきらめ流れに身を任せ

さだめとは椿は春を待てず散り

本当に飛ぶ気へ川の幅が伸び

あきらめなさいと雲間へ月が消え

米子市 林瑞枝

美女酔うて歌えば宴会どつと湧き

盲導犬命令に逆う術も知り

迂余曲折愛の歴史を振り返る

遊びたい盛り商家の子と生まれ

竹原市 小島蘭幸

届かない想い横顔だけの人

手紙焼いても きっと忘られないだろう

君のすべてを知らないうちに別れとき

うしろ姿を大きく見せて男去る

大阪市 木村水洞

ポスターの立ってるところで派手な事故

漫才のような喧嘩で長屋暮れ

恋してる事が見抜けぬ男親

寝正月出来ぬ職場に悔はなく

和歌山市 垂井葵水

初茜商家これから寝るとする

別れ来てより体臭に身悶える

追い書の句にあたたまる年賀状

気脈あい通じて真ッ正面の敵

大阪市 宮地双楽

長男の死(二句)

寿命だと諦めかねる父の愚痴

父 兄弟 残して先に亡母の膝

行き先もあても無いのに靴をはき

愚かさがなく賢しこがる現代子

羽曳野市 榎本吐来

送られる長さをベルに救われる

年末の床屋一ちょう又あがり

老人が住んでいるらし注連飾り

三カ日過ぎて禁酒を又誓い

堺市 藤井一二三

税務署と女房共謀になって取り

師走悠タルンペン一人欲がない

社会鍋の声くじを買う輪に吸われ

東大阪市 竹中肖二

福笹に銀行小判着けて呉れ

母ちゃんの方が喜ぶお年玉

金賞と銀賞の菊比見べる

岡山市 大森娛句案

めでたさを共に分け合う俺が春

お医者には内緒互に陰で飲み

エノケンの死をいたみて

おめでとう笑わせぬいてから泣かせ

宇部市 平田実男

すれ違うペタルがにくい向い風

まだ宵の口と屋台が云う0時

野良犬の逃げ腰で食う癖がつき

唐津市 新岡回天子

引揚げ

二十五年どうにか生きた笑みにあう

笑い声引揚忘れた者も居る

それぞれの職を求めて今日逢う日

守口市 羽原静歩

黒猫のタンゴ虫歯が笑ってる

春斗へ漫步する日のプラカード
テクニクばかり会議の煮え切らず

桜井市 岩本雀踊子

虫けらのように停年ない職場

朝星へ長寿法の背伸びする

金ですむ話に金のない弱味

竹原市 時広一路

太陽に隠れて影は住んでいる

充ち足りたとは言いきれぬ笑顔です

海の色変えて静に雨は降る

和歌山市 土谷城石

老いの耳よければよいで邪魔がられ

何もかも聞えて困る老の耳

日の丸を振った背の子に孫が出来

島根県 堀江正朗

妻の手を握り直してや々と耐え

まだファイトあるから子らと議論もし

手さぐりで結構たのし僕の初春

大阪市 宮尾あいき

えびす様風景(二句)

値上りの福笹息子が買うて来る

ささ売りの芸妓に見惚れて足ふまれ

ふり袖の胸はずませて子も二十才

岡山県 横山一声

還暦のファイトへ精力剤がいり

秋刀魚が高いと鯛を買ってくる

田を売った金の行くえをうわさされ

出雲市 原 独仙

欲の出た頃に停退迫ったり

納棺へまさか負債は入れられず

節くれた手のかるた取る鮮やかさ

岡山県 池田古心

結婚式誓約其の時だけになり

明日も晴れ呑気に悟る早仕舞い

病人の耳に不吉な鳥啼き

下関市 国弘半休門

大男おんなに叱られ飲みに出る

春が来た進学祈願のママに來た

少年の飛球バリケードを突破

島根県 藤井明朗

末っ子も珍客にする新春の膳

風邪ひいて風邪の妙薬寝るとする

わが還暦

歳若う言われて還暦の気になれず

呉市 林野甦光
嫁ぐ気になって休日無駄にせず
城門の取手に三百年の錆

交通の便利に住んだ砂ほこり

小松市 浅野芳朗

怪談へ立番がいる子のトイレ
泣くまでは父にも面白い子守り
討論会すればよさそな投書欄

大阪市 太田良子

初詣無心の気持が手を合わせ
永病い元旦だけは薬ぬき
雑布の手 これからは診察です

大阪市 天正千梢

元朝の空へはばからず涙出し
初老の心 思慕晒け出し
お愛想がないので皆んな寄って来る

姫路市 隠岐不酔

女事務去年と変った日本髪
本心が言わして酒が罪を負い
何故に 整形外科へ親不孝

大阪市 河井庸佑

雑沓へもまれに行くに晴着きて

おみくじは凶 凶なりの策を立て
子には子の言い分がある通知票

ハワイ 築山快夢起

老妻の頓智押売り寄せつけず
早熟か十二の孫がアイシャドウ
君が代に明治生れの眼がうるむ

大阪市 児島与呂志

働いて働いて馬鹿歳をとり
えらそうに云われて娘らの気嫌とり
おしゃべりで胸の重みを軽うする

東大阪市 久米奈良子

病床の母に病身いたわれ
乱菊の花弁の反りにある愁い
撫で肩の長女に責のずしりと

松原市 谷垣史好

死に誘う音でガストロップが燃える
いたわり合うて生きる哀しさ
若さとはボロみたいなのがよく似合い

大阪市 加藤貞山

売り娘いとし師走の笑顔忘れな
どん行で初旅足の向くままに
寒に入り春を匂わす福寿草

奈良県 西 辻 竹 青
うたがわすめいどで待つと言いのこし

秋芳洞にて

案内へ只フンフンと秋芳洞

水谷竹莊病床に見舞う

病床を訪えばアベコベいたわられ

大阪市 今 西 章 雅

転々と職場を変えた手八丁

紅葉落葉腐土となる日は見てくれず

転勤転勤最後も社宅で来た停年

倉敷市 小 野 克 枝

無事明けて初荷札貼る有難さ

心の戸そつと叩いて遠ざかり

耐える掌に哀しい冬の雨が降る

富田林市 浅 川 八 郎

挑戦をするだけあって隙がない

市長病何う写るやらレントゲン

裏口へ有無互いに相通ず

大阪市 室 谷 鉄 舟

うそつきが自然の味を忘れさせ

風呂好きが風邪を療しに風呂へ行き

自慢気に連れてる犬のチャンチャンコ

西宮市 島 居 百 酒
税金のほかに海外へ捨てに行き

年末薩南旅行

指宿のジャングル風呂で風邪をひき

開聞岳記念植樹の裾模様

芦屋市 丸 川 初 甫

プロポーズ先手があったとも知らず

代役の顔には重い胸のバラ

石仏にふれて千年の音を聞く

笠岡市 木 山 要 次

男か女か痴漢躊躇する

証文も出て来て家の浮き沈み

手ぶらでは行けぬから義理を欠き

小松市 四 方 天 弘 実

路線バス生活の匂い乗せて混み

筆算をして計算機試めされる

ストーブの炎生活の彩に燃え

奈良市 宮 口 笛 生

数の子ぐらい買うさとボーナスくれるなり

ねてすごすを幸せとする三カ日

正月を働く弁当持つて出る

平田市 久 家 代 仕 男

手の焼ける孫がうれしい母の愚痴
子の視野の広さに黙ただだ呆れ
策もなく過疎手詰まりの駒に似て

島根県 小 砂 白 汀

七光り過信親類よりつかず
適当にだまし欺まされ笑い合い
もの怖じもせぬ末っ子をけるがり

奈良県 草 深 醉 升

候補者もタレントなみのメーカー
屠所行きの牛自動車でのんのと
買初めは通勤定期仕方なく

久留米市 永 松 道 雄

暗然とぬかずく友の枕経
社会悪犬が嗅ぎ出す御元日
焼鯛の骸骨派手な松の内

兵庫県 大 江 秋 月

発車ベル接続の客走らせる
行商が降りて出口が広くなり
長男が晩酌手伝う年令になり

大阪市 島 野 大 吉

静けさが我が足音を追いつ立てる
長廊下捨てる吸殻持ち回り

ウインドのダイヤに瞳射返され

岡山市 川 端 柳 子

親ごころ子心春を待つ背伸び
花道を歩いて神に声かけず
あわてない筈があわてたような年齢

大阪市 川 口 弘 生

頼むとは云わず事情だけ話し
先生もタコヤキ屋もご一票
早生れ痛々しいよなランドセル

今治市 越 智 一 水

怒らずにすむこと怒る十二月
ふるさとのスロー若さがはがゆがり
この春も見なれぬ鳥が庭へ来る

堺市 新 谷 笑 痴

親犬と仔犬のきつとよい対話
人生は塗絵でないと胸を張り
自らの翼を試みて翼に落ち

大阪市 西 川 誓 二

初詣寸景三輪明神
戌歳の黎明寿ぐ大とんど
還暦で逝きし親父と肩並べ

沈黙をほぐす気転の茶が這入り

大阪市 福井多蘭子

幸せであると気付いた茶漬あり

女上位おふくろの味遠ざかり

新年

おろがんで心で頼むことも無し

和歌山市 西尾公作

子の親となつて暦に弱くなり

ウインクの通りランプ合つて来ず

国旗立て飯場はビルを見返えせり

高石市 谷沢好祐

カー買うて欲しいと子供出来てまで

日曜の雨戸朝日にせかされる

松江市 岡崎祥月

一步一步踏む堅実に築く道

負けてはならじと齡ははっぱかけ

倉敷市 藤井春日

お茶漬の音も羨まし三分粥

ゴマ攪りの一手でポジション死守する気

姫路市 村上春巳

塵を焼く煙に晦日の茜雲

息ぎれをすまいますまいと四〇坂

鳥取県 森田布堂

失言の詫びに銚子が並べられ

入墨が来て銭湯がみな黙り

八尾市 古川鶴声

新春を寿ぎに来て酔いつぶれ

達筆も相手に読めねば役立たず

松江市 柳楽鶴丸

毒舌をまくしたてて妄言多謝

質屋からの賀状貧乏証明書

東大阪市 竹中綾女

大晦日孫にせがまれ遊園地

風上げは校庭借りてやっと出来

京都府 清水谷 句楽坊

猫のよな虎でも孫はほめてくれ

八十二のサインはめられ絵にも凝り

——自選—— 名古屋市 吉田水車

顔いろを見い見いぬるい酒を酌ぎ

お悔みは歳から先きに聞きたがり

男ただ散髪をして春にする

傲慢も個性と許す職場の灯

岡山県 田村 藤波

子の夢を育てて楽しい親の夢
広い土地を遊ばせている下心

三面鏡買わせるまでの好きな人

横道にそれ一生を棒にふり

大阪市 不二田 一三夫

妥協せぬ頑固なタビの右左

ぼくのカレンダー 日曜日がない

寄席（二句）

拝みという泣きまで入れて手をもらい

松葉家 奴

奇人ともいわれ名人芸の「釣り」

★

北川 春巢

転居（枚方市へ）

配達が一日一回とは淋し

ちと広くなって掃除機役に立ち

天王山あれだと二階嬉しがり

設計士医者とは知らず竹を植え

大阪の土産喜ぶ妻となり

若本 多久志

十年もかかる抱負を新大臣

幸福を祈る賀状に食傷し

寒厳しあれも逝きこれも黒枠

孫三群スーパのさめぬ距離に置き
悟りとは別に医業にしがみつ

菊沢 小松園

塔上に九輪きびしき身の構え

九輪外輪喰べられそうなちぎれ雲

雲はるか九輪水煙眼もくれず

塔上に同じかたちの雲を見ず

ちぎれ雲九輪あたりへ引っかかり

川村 好郎

着かざって心の貧しさかくす気か

来賓席かけ持ちらしい顔ばかり

あげ底の企業銀行だけが知り

小走りの女のくらし邪魔すまじ

つらあてかどの益も女受け

西尾 栞

腕組んで廻す手形に割る手形

モシモシワタシという電話も過去の声

香煲の相場も上ったなと包む

無欲になれば判断誤り

湯治場の障子の外の人往来

川傍柳 初篇研究

(八十二)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

606 亀沢町の湯で炭部屋の噂

五 扇

川端||亀沢町は本所の一町名で、吉良邸は本所松坂町にあった。本所開発当時、この辺に広い沼があり大亀がいたので亀沢と称したといわれ、後に堅川・横川の揚土をもって埋め立て市街地とした。句意は吉良邸のある松坂町に近い亀沢町の湯屋では、義士討ち入りの噂話でもちきりだっただろうという想像句。

高須||本所亀沢町は、いまの墨田区亀沢町で、一丁目から四丁目までであり、松坂町に最も近かった。それで見苦しくも炭部屋にかくれていた吉良の最後の噂をしあっているのだが、当時の庶民の寄り場といえは、銭湯と髪結床。それで銭湯を詠んだのである。

丸・岡田||両説に賛。

607 塩まぐろ取廻^{かきまわ}ているかゝたち

五 扇

川端||魚売りの情景句。

まぐろ売根津へへなくかつぎ込^{七・九}
どっちでもお取りなさいとまぐろ売^{二〇・二四}

高須||塩まぐろというのは当時の安魚で、庶民階級のお惣菜サカナであつたらしい。塩まぐろ焼けばありたけ猫が寄り一六・一九

と、猫や犬が鼻をヒツツカさせた句がある
前田||高須説に賛。「取りまいている」

「かかゝたち」なかなかうまい。

清||肴売、鮎売、鰯売、鯉売、さしみ売等々、江戸の町には、紺の胸当てに向鉢巻腰肌抜きで、いせよく売り歩く肴売りが多かった。

丸・岡田||高須説に賛。

608 舟やどの女房かしりを忒寸ぬひ

亀 遊

川端||氣がせくため、着たままほころびを縫わせたというだけのこと。

舟宿の女房立たせて置いて縫ひ 一〇・二四

高須||「舟宿」というのは、柳橋・山谷堀などの大川ぞいに並んでいた茶屋で、遊船をしたたのでこの名があり、その女房や娘は色っぽく、氣がまわつたので、川柳にも大衆文芸にもよく出てくる。次丁にも

「いごきなさるとおいどを縫ひやすによ」があり、同巧異曲であろう。柳雨翁は「息子のシクジリ」を舟宿の女将がカバツてやっている句?とも言っているが、それだと狂句臭フンブンとなる。

前田||礎稿の意でよいと思う。

清||遊びに行くには無粋な恰好ではいけない、舟宿の女房が遊客の姿を見てやっているうちに、ほころび等を発見するのである

う。これも商売のうち。

藤井||文字通りに素直に解したい。

丸||賛。客なれた船宿の女房ぶりがほうふつする。

岡田||同。舟宿の内儀には女郎あがりなどが多かったのである。

609 豆腐鉋丁でけづってくべてみる

水砥

川端||伊達候の伽羅の下駄を削って、くべてみただろうという想像句。

すでのこと伽羅で豆腐を焚く所 三五・32

真鍮の庖丁で下駄削って見

前田||賛。伽羅は熱帯産の木材で名香に富んでいる。それで削ってくべて、その香りを楽しむ趣向。本物かにせものか——。

丸・岡田||礎稿賛。

610 元結あげかけて五右エ門をはらみ

兎弓

川端||鞍馬先生に左の御教示をいただいた

「庚申の夜は男女の交りをしないことになつて、その日は元結を上結に結んで禁欲のしるしとした」

色情去って元結上げてゐる

一三・3

色情去って丈長女房揚げ

五・3

庚申の夜は丈長に及ぶなり

二〇・9

庚申の夜に孕めば、その子は盗人になるという伝説がある。石川五右エ門は、庚申の夜に孕んだと伝えられている。

高須||庚申の夜の句とは判るが、上の句の「元結あげかけて」に疑問が残る。「今夜

は禁欲」のしるしに元結を上結に結んだのはわかるが、それを中途にして、つい夫婦がなじんでしまったというのか。

盗人の子も出来ようと姑い、

今日は庚申だと姑いらぬ世話

庚申の夜はもちのよい嫁の髪

など、類句は沢山あるが……。

前田||同。「あげて」ならわかるが「あげかけて」はおかしい。

岡崎||礎稿に賛。庚申の夜は亭主と同衾しないつもりで、ひさしぶりに髪を洗い、さっぱりとして丈長で平民結にゆいにかけて思い直したのである。

清||思い直したのではなく、元結にゆいかけている所へ亭主が……であろう。そこで

庚申の夜とは知りながらついつい……。五右エ門は、この句の場合は固有名詞ではなく、どろぼうの代名詞と考えればい

う。

藤井||賛。庚申の夜の丈長、日本髪に元結の件は、岡田先生の「末摘花詳釈」に詳しい。亭主の情にほだされて解したいから

清説に賛。

丸||庚申の夜元結をあげかけたまま、どちらからともなく禁を破つてあの五右エ門を孕んでしまった。「こらへじやうなく盗人をはらむなり」(一三・二)の「ぬすびと」を、特定の五右エ門とした——伝説に付会して——までの句。

岡田||同衾禁忌のしるしに元結を高く結ん

だのではなく、庚申にはそういう髪のかい方をしたので。」「上げかけて」は髪を結っている途中に……の意か、その女房の拒絶も途中でぐらつてしまった意が密されている。

611 耳へおつけ損料やが来やした

五雀

川端||鞍馬先生は、禿がそつと耳うして

いるので、八朔の白無垢の損料かも知れないといつておられる。

高須||三面子先生も、そう解していられるが「来やした」という言葉がどうも気になる。損料屋だから、貸衣装には間違いないが、この場合「八朔の白小袖」と考える必要性がない気がするが……。

前田||礎稿に賛。強いて変にとらなくてもよいと思う。

清||「耳へおつけ」は禿を表現する時の常とう手段。八朔の白無垢が妥当なところか。

藤井||年に一回しか着ない白小袖だからこそ、貸衣装と思われる。礎稿に賛。

丸||礎稿のように解しているが、高須説のようにどうも「来やした」が気になる。禿のことばなら「来いした」とでもいふべきだろう。「けいせいをくぼく見て居るそんなや」(二二・17)

岡田||八朔の白小袖ばかりでなく、正月の年礼廻りの衣装も大へんだし、情夫に入れたげたりすると、見世へ出る衣装にも困る場合すらある。だが、やはり八朔の白小袖が適切か。耳打ちするのは、やはり禿。

中国の靈藥

東野大八

中国大陆を旅すると、どんな片田舎にも、「仁丹」や「宝丹」の看板が眼についた。このクスリ屋の商魂のたくましさに大いに畏敬の念を覚えたものである。

仁丹や宝丹は、文字づらが至極中国人向きにできていて、この効用の方が中味のクスリの上を行くこと数等であった。

仁丹の下で八路の歩哨立ちという古い大陸吟を思い出す。

ところで、春三月とあって、今回は中国の靈藥だんぎでお茶を濁すことにする。

中国の藥は大別して二様になる。実験して藥効を示したものと、ただ概念的に珍貴であるというにすぎないもののそれである。前者は實際、後者は風刺が調剤である。

むかしの人類は、草根木皮で病いに対処した。北京の中国人も

「外科の手術は西洋人にカプトをぬぐが、内蔵治癒は、中国の漢方がはるかに上だ」と語ったことがあるが仰せの通りである。

犬や猫などは、天性によって有毒、無毒の識別に長じているが、人類は、有毒のものを名藥にかえる才能を持っている。アイヌは毒矢の塗藥を作るのに、藥を煮詰めてなめてみる。利いたと知ったとたんに、マキリで舌を削るのである。中国もこの例がふんだんにあり、後世の人柱になって昇天した数はけだし相当なものだろう。早い話がシナ料理にしても大体二千から三千種類もあるそうだが、珍味求真のため、さまざまテストをやり、食い合せなどもふくめて、その犠牲者は数限りなくいたことだろう。「叔明雜話」によると、臭虫（南京虫）まで食味したのがいたとある。

明の李時珍の「本草綱目」は、神農が百草をなめて本草を見出したことから説き起し、漢方万般を記述してマクラになるほどのぼう大なものだが、この博物書の労作も、藥効の説明が甚だ誇大で奇抜なものまじり、神仙談になると奇想天外である。

「白い頭のカラスを七十二の庇玉でせんじて飲めば、白髪が黒くなり、稚齒を生ず」なんてのは、中国漫才（雜黃）のタネにされているほどだ。

魯迅の「吶喊」の序の幼時の追憶淡に

「四年ばかり、毎日、毎日質屋と藥屋の間を往来した。藥屋の机は私の背丈ほどの高さだが、質屋の机は私の頭の上にあった。私は頭の上の方へ、着物やカンザシを投げ上げ、馬鹿にした顔でわしし出す若干の金をにぎって藥屋にいく。長わづらいの父のための藥である。処方に当るのは有名な大先生だが、所用の藥は特別奇妙なものが多かった。

冬期産の蘆の根、三年の霜にかかった甘蔗初めてつかったコオロギ、実を結んだ平地の木……」

魯迅は、その後、医者を志し全体新論や、化学衛生論を眼にして、中国医藥が意識するとせざるにかかわらず、大いなる詐欺を働いていることが判った、と述懐している。

始皇帝や漢の武帝は不老長寿の仙藥を八方に求めたが、しよせん益なきことで、逆に得態の知れぬ珍貴なるもので命を縮めた帝王もかなりいたことだ。したがって李時珍の荒唐無稽の仙藥の効能書は風刺に通じよう。

彼は木は木で繼いで若木とする以上、人間は人間を用いてこそ自然の療法であると説いている。甚だ合理的論法だが、困ったことにその實際は、甚だ怪しい。すなわち、処女の首經を用いねば若返ることゼツタイだと主張した。女の月経は、前が陽で後が陰であり、

陽の極こそ初潮にしくはなしと唱えた。この説に袁世凱や張作霖、張宗昌がふかく信じ込んでいたとあるからおそれ入る。明の陶中達、童子の便尿を用いることを帝にすすめ、光祿大夫柱国少師保林部尚書という栄職にありつき、盛瑞明も遵生八箋をすめて、一躍大官になった。八箋というのは、童便を八度さらして粉末にするという製法だが、木綿や絹ものではあるまいし、小便をどうしてさらすのか、一度おうかがいしてみたいものだ。

強壯補血剤は、冷やすのと温めるのと二通りある。冷やす方は朝飲み、温めるのは夜飲むのである。冷やす方は、燕窩と真珠の粉末で、温める方は人參、推茸の類である。前者は海つばめの果のことで、シナ料理にはつきものである。真珠の粉末は、鳥羽の三木本真珠の庭先へいけばいくらでもある。人參、推茸は、八百屋の店先のきまりものみたいなものだが、むかしの中国の薬法なので、いずれも往時としては、特殊な種類のものを指し、このことにちがいない。だが、今日ではそう大して変りばえしたものは思えない。人參など韓国ものもものではやされているが、韓国人にきくと昨今はニセモノばかりだそう。中国の靈藥関係の本を読んでいくと、一番まちがいのなさそうなのが、ニンニクとハチミツの合成ぐらゐいものだ。一房のニンニクを生身にむいてバラバラにしたのに、ハチミツをニンニクがたっぷり浸すだけ入れてトロ火にかける。やがてクリーム状になるからそれを飲む。頭の白くなった私は、この製法に

魅惑を覚え、近く実験してみようかと考えているが、さてどうか。

ついでのことなので、西鶴の好色本に、牛黄、馬宝の秘薬のことが出ていたので、一体どういうシロモノかと調べてみた。すると、どうやらこの秘薬は、胆石病に似た病氣持ちの牛馬の肝臓のことを指していることと分った。ところでこの牛馬だが、原書によるとチベット産のものをいう。陝西、四川産の牛黄は、西黄といつてチベット産に匹敵するが、広東産の広黄も珍重してよいとある。牛黄になる牛は、世の常のもの食さず、その地方の野に生える仙草ばかりを食し、仙草がなければ啼き猛りついに死ぬ。その病狀が現われた牛は、胸のあたりが光玉の如くてりかがやいてみえる、とかいてある。

牛、馬の肝臓がそのように牛黄たらずとも効能があるのなら、チベット、広東、四川、陝西の牛たらずとも、日本産のものでも余効はあるだろうとさる中国人にきいてみたら、朝鮮人參と普通の日本人參ほどの差があると答えた。そこで、新橋辺のホルモン焼の肝臓でも無きに優るわけだな、といったら、彼はホルモン焼という字を頭においてたべれば実効はある。とニヤニヤ笑って答えただけだ。

大陸の軍隊で暮らしていたころ、田舎へ討伐に出た道すがら、道路わきで中国人の百性たちがわいわいやっているの、何んだ、ときいてみたら、にわかの腹痛で往生しているんだ、とのこと、それは氣の毒とクレオソ

ートでもやるつもりが誰も持たせない。仕方なく誰かが飲み残しのサーダーをやつて、大笑いして出発。ところが夕方、その場所にさしかかると、西爪や真爪を山のように積み上げ、われわれをサービスしてくれる。一体こりや何んだ、というところ「タイジンに貰ったあのクスリが効いてピンピンしている、お礼のこれはシルシだ」と答えた。

こんな例はいくらでも大陸の田舎にはある。穴錢集めに山東の奥地へ出かけた日本人が、クスリをせがまれ、きげんを損ね馬賊でも手引されては厄介だと、ライオン齒磨の粉を水でといてのませたり、腫れ物の奴には靴ずみをぬつてごまかし、みんな大喜びして穴錢あつめに村中で協力してくれたそうだ。大陸川柳同窓会の御連中のなかには、こんな笑い話はふんだんにお持わせのことと思

橘高薫風著

れも

五百円(送料共)

うが、病いは氣からで、病氣と書く。まことに當を得たすばらしい作字であると、私はよく以上の話を具体例に銘記しつつけているわけだが、中国の靈藥もしよせん、靴ずみや齒磨粉の卓効に通じているものが大勢と思うのだが、どうだろう。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

三切れたままで宴会弾き終り

若柳 潮花

三の糸はよく切れる、それだけよく打たれる弦で地唄、常盤津、清元など優雅、悲哀を現わす曲には大切な糸だが、近頃の宴会では三味線が泣くような流行歌ばかり、たとえ三の糸が切れようが、一と二の糸で合せておけば、お気付きのない遊人ばかりであるという皮肉な句で面白い。

素顔とは耐えた涙の通るとこ

金井 文秋

喜怒哀楽を超えた男の苦惱、孤独、絶望の果てから湧き出た涙が干せたその素顔、そこから又、新しく広い深い無限の人生が始まる。

襖絵のすそに可憐な饅頭菊

山川 阿茶

醍醐の三宝院か建仁寺の法丈あたりで見かけた襖絵に、こんな図柄があったのを覚えていたが、デリケート女性の眼がす早くこれを見

捕えて、十七文字にまとめた技法に感じ入る

吃逆を一つはかなく息が絶え

福田 丁路

人間の臨終ほど哀れ悲しいものはない。「既に無常の風来りぬれば、則ち二つの眼たちまちに閉じ、一つの息ながく絶え、紅顔むなしく変じて桃李の装を失い……」と仏聖親鸞の訓えは厳しく身に沁みながらも、一日一日を只うかうかと送っている我々ではなかるうか。

うつとりとする愛があり無一文

天正 千梢

一月下旬、NHK、TV「今日は奥さん」の番組に「家庭とは、男、女にとって何か」というテーマで興味深く論ぜられていたが、いみじくもこの一句がその結論を出しているようである。自分はずいぶん男と、こんな女と結婚したのだろうなどと、思い浮べる夫婦であっても、時折、うつとりとするような愛情や、想いやりを認め合うことによってその絆は永く永く解けることがないのであるう。

別れても逢えば挨拶して欲しく

小島 蘭幸

さらさらと詠んだ十七文字に、女の業とでもいうものを覗かせた句である。それ故にこそ、女の悲劇は永遠に絶ゆることがないであろう。

人工着色（ここにもあつた三面鏡

若林 草右

人工着色や甘味料のチクロが社会問題になり、市場に売っている食料品はどれ一つ、安心して買えない世の中。そんな事を考えながら三面鏡に向っている自分も、せつせと人工着色をやっている矛盾にはお気付きにならないであろう。着想の妙。

心では許し言葉が見つからず

高橋 千万子

許すという心は沈黙を守ってこそ尊いものである。許しを乞う者の眼差しに対して、何事もなかったように振舞って許す心。それが沈黙の徳でもあらう。

特急にお尻を向けて刈る農婦

小野 克枝

「お尻」という言葉が少しも句品を落すことなくスラスラと詠まれた写生句に、軽いユーモアを感じる。あらあらしい今の世相に、人々は何かユーモアを求めているのに、どの柳誌にもユーモラスな句が、段々少なくなってきたことは淋しく思う。

横に這う蟹宿命に逆らわず

藤井 一二三

己を知ると言うことは、己を限定することだ。又自己に対して一種の諦念を抱くことだと教えられたのを覚えている。人間としてこれが一番聡明な生き方と言える。この蟹のように決断してその限定に堪えるだけである。

(次号は 西尾 栗氏担当)

近作 柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

粘着力のあつた鑑賞眼の梅志、惜くも既に亡く、今また白柳九輪に通れて塔上遙かに雲の上の人となる。遂に小松園にこのポストが廻つて来た、素よりの禿筆望むべくも無いが責だけは果たすつもり、適者生存は自然の摂理であるものを現代のゲテ物好みの錯倒時代の要求に依つて斯んなことも許される範圍のものかも知れない。

それ以上どうもようせめ肩を抱き

志賀 木石

限界を意識している恋の傍なき、思慮分別の上に恋はない、大人の恋の何と空虚なことよ。

風車ある日風に逆う夢を見る

岩谷 二三枝

生活のリズムの中に毎日きっちり嵌込まれて世間が感心している平和なくらしの中にも時には反逆の血が叫ぶ、それも女気の夢の中

で。

言うだけを言つて親子の仲になり

堀江 芳子

複雑な人間関係は時に親子の仲にも癪りは出来る、だがそこは有難いもので言つて終えは何の禍根も残さない親身のほつとしたもの感ず。

芸術のむこさは流儀に耐えている

河野 君子

芸術とは人間の限界を示すものであり、ある意味では人間そのものであるかも知れない。人間の欲張りの犠牲に歪められた可憐なものへの愛情を、この作者は小賢しくも捕えて居るむこさと言ひ耐えると言う処に、流儀の名で情け用捨もなく切り捨てられた人間の勝手に對して、行き届いた女気の繊細な感情がよく現わされた。

十一時閉店自分の顔となる

別宮 すき

閉店の時間である程度の商売の範圍も判り女気の苦勞も察しられる、そこで自分の顔の表現も生きて来る。省略の心得方がよい。

誘蛾燈罪なき虫まで誘き寄せ

谷 森 和 風

一網打塵に益虫も必ず入る、野次馬根性の

失せぬ限りはこうしたことは必ず起る。政治運動にも学生運動にも。

ブラトニッククラブではとても間がもたず

林 露 杖

人生経験の豊富な眼からは、左様に見えても、案外若者の心理は純なものがあるのではないが、曾ての自分達がそのように大人達に見られていたように、とてもがよく利いて一句の構成の上に動かせぬものとなつて、独断を理由附けているのも面白い。

ほれぬいたばかりに個性つみ取られ

木村 弥栄子

本当の恋とは奪ひ奪われるものと言う。こうした意味では、没個性まで行けば幸せな羨やましい恋だと思ふ。与える幸せはキリストも説く。

社会鍋ネオンの色に染らない

ふきあげ 虎城

地上にある社会鍋、屋上にあるネオン、公明党と共産党以上の違いだ、彼我對照の妙を取る。

(次号は川村好郎氏担当)

清水白柳選

倉敷市 本田 恵二 朗

人格を二つぶらさげ濶歩する

絵に画いたような伝説 子に聞かせ

大阪市 橋 高 薫 風

元日や偶頰^{じゆげ}のごとくに師の一句

釣針を整うごとし 旅前後

八代市 船 木 史 朗

無に還る櫓へ何をとがめよう

倒産の噂 去るべきはみんな去り

倉敷市 水 粉 千 翁

反省をしたい 小さな咳を入れ

鍵掛けぬ扉の誰れも寄せつけず

松原市 谷 垣 史 好

この女の静けさ 空気も動かない

周囲みな宅地負けるな 葱坊主

富田林市 定 金 冬 二

ふるさとで火を焚く 夫婦かも知れぬ

きようもきのうも 泪がたまる駱駝の縮

堺市 墨 作 二 郎

顔洗う 鴉が窓に来て悔やむ

小さな窓から女のカルテ焼くけむり

大阪市 小 谷 葉 子

敗北の受話器に 女のポーズ

断崖に立てば後ずさりする君か

倉敷市 小 野 克 枝

タコグラフ狂うな 未来図が消える

大阪市 江 城 修 史

乳白の霧が仕かけた愛の罟

竹原市 三 宅 不 朽

わが指にレモンなじまずそっと置く

熊本県 有 働 芳 仙

埴輪の目の奥に太古が生きている

和歌山市 垂 井 葵 水

ジョーカーの反抗 私を試みる

岡山県 三 輪 康 明

師走縫う苦惱ネクタイに手がかかり

大阪市 神 谷 凡 九 郎

面白い程二人連れふたりづれ 僕だけが一人

竹原市 生 信 笑 子

奇蹟待つ身に粉雪降り続く

東大阪市 久 米 奈 良 子

得しものと失いしもの 新春めぐる

抄 輪 九

宛字で通し ハツタリで世を渡る
鳥取県 鈴木村 諷子

闘争の鉢巻 初荷へ締め替える
神戸市 仲どんたく

今日からは治る気がする 胸がすく
大阪市 酒田清子

骨董の中に暮しの知恵を見る
大阪市 金井文秋

詫びぬ子へ望みをかけている教師
岡山県 直原七面山

月踏んだ罰か地球はどこも荒れ
下関市 桜川不水

風下へ妻を立たせて待つホーム
羽曳野市 麻野幽玄

妻別居 新幹線の旅を言う
松江市 津川紫吻

長欠へ教師の知恵も行き詰まり
岡山県 浜野奇童

九輪抄第一回の発表なので私も多少堅くなったようだった。
雑誌の場合の選句にはもっと巾を持たすべきだったかも知れないが、出来るだけしばってみた。それでも難解な句があると言われるかも知れないが、採った作品は納得のゆくもので説明を求められても解説出来るものばかりである。もっとレベルアップ

懐は空らでも 胸を張る男
姫路市 村上春巳

通勤車 小骨が折れるほど押され
八尾市 高杉鬼遊

面白いものの一つに鼻の穴
桜井市 岩本雀踊子

産もなく句帖をわれの宝とす
和歌山市 秋月宏方

長男、三女結婚、還暦祝
愛媛県 渡辺曉童

お目出度が連鎖反応おこしたり
藤井寺市 西いわを

奈良西大寺瞥見
★ 何時迄も放っておかれるのか 礎石

やきもちを聞き味噌汁で舌を焼く
清水白柳

忙中閑あり接待の公務員
プをすればまだまだ多くの作品を闇に葬らねばならなくなるので初めてにも拘わらず予想外に多くの方から御投句を頂き力づけて下さったことは本当にうれしかった。どうぞ今後も私を驚かすような作品を見せて頂くようお願いしたい。

外来語と

外国語

戸田 古方

マッチを燐寸（リンスン）トンネルを隧道（ツイドウ）タバコを煙草（エンソウ）……といわないと罰金を頂きますというゲーム、戦争の頃よく流行りました。外来語は敵性語だというわけだったのかもしれない。

とにかく、日本人の書いたり喋ったりする中にありすぎるほど片仮名が沢山あります。わざわざではなく、日本語の中にちゃんと座を占めているものだって少くはないのです。何しろ、十六世紀にスペイン、ポルトガルとの出合以来ですから、金米糖、有平糖、合羽更紗、金巾等々、日本語でいいかえられないものが一杯。

シャツ、パッチという日常語も勿論外国語。シャツは英語から、パッチは朝鮮語とか。このシャツ、パッチを旧陸軍では衣（い）袴（こ）といっていました。それでもボタンだけは、漢字の釦の字を使っても、発音はボタン

のままでした。

メリケン粉にメリケン波止場、明治以来使った言葉です。アメリカンがアクセントの関係でメリケンとなったのでしょうか。そういえば日本人の使う米国も、中国語の美国もよくこのアクセントを重ねたものです。こういう風に自然にアクセントが重なぜられたまま日本語に取り入れられているものは別として、いちいちアクセントを気にして外来語を外国語なみに発音しなければならないかどうか。

サブウェイといえば地下鉄だとわかるのに外人の発音がサブエときこえたので、ご丁寧に福井県の鯖江を教えたという笑い話もあります。この間、あいディアと頭にアクセントをつけていつているのを英語の先生にとがめられてる人がありました。これはアイでいいと後ろにアクセントをつけねばならないのだそうです。成程、英語となればアクセントが問題で、ヨーロッパ赤ゲットがアクセントをつけずにビクトリア、ステーションといっつて通じなかった。それはビクトリーアと「ト」を強くいうのだときいて、難しいうものだと思いました。これは英語での話、日本語の内にいり込んだビクトリアはビクトリアでちっとも差支えないのでないでしょうか。アクセントといえば日本語にだって問題はあります。関東であメと前に力を入れていう

磨かれた伝統の味



司子集

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

雨を、関西ではアめと後ろへ力を入れる。どうしてもアめでなければならぬのは、「雨は降る降る城ヶ島の雨は……」

の雨で、さすが関東の歌、アめでは歌になりません。へんな雨談義の落ちになりました。外来語というのは外国語ではありません。

日本語の中へちゃんと座っているのです。日本語に合うよう、日本語をつかう人々に通じたいので、原語の通りいわずともいいのでないかと思うのです。私もリクリエーションというていて、あれはレクリエーションだと直されたことがあります。リクリエーションでは楽しくはなっていない字だとは英語

の先生の弁です。でも、相当教養のある人でもリクリエーションで平気で通じています。

これを正しくする方がいいのか、そうしないでもよいか問題です。

いつか、路郎先生から協の字を協と書いて御注意を受けたことがあります。協では協力ということにはならず、むしろ逆の悪い意味になるとおっしゃっていました。

学術や芸術、スポーツの世界で、随分外国語をナマのまま使っています。それを日本語に直すのはとても思わしい。しかし、これとても外国語じゃなくて日本語として使われている外来語です。外国人がきけば変でしょうし、日本人同志なら通じているのですからそうやかましくいう必要があるかどうか。

日本語をやめて英語を国語にせよという意見が明治のはじめにあったとか。戦後の日本には、米軍進駐以来、思いがけず広い範囲にスピーキング、イングリッシュも普及しているようです。テレビのC・Mでも Hamilton is the best watch in the world とか Dunlop ball is best とか、と正しい発音、正しいアクセントで取入れられ、それに馴れてきた人も殖えているようです。あいディアがアイでいいアでなければ通じない時代が近く来るかもしれません。それまではあいディアであろうがアイであろうが、日本人が日本語として使っている限りは差支えないのではないで

しょうか。

あっちこっちで、こんな問題にぶつかっている間に自分でも疑問になってきました。

川柳も見ただけではなく、耳できく場合も多いようです。カタカナの使用も殖えてきています。はたして原語通りの発音やアクセントでなければいけないとなると、作句上にも問題になってくると思ったのです。

どっちでもええやないかなんていうたら英語の先生に盗人猛々しといわれそうです。が盗人猛々しついでに止めの一言。

イギリス人はベネチアをベニスといい、イスパニアをスペインといった調子です。フランス人はHの発音ができませんのでヘンリーをアンリー、ヒストリーをイストワールといっています。自分流にみんなひんまげているのです。世界中みんなこんなをやっているんじゃないですか。

★ 大萬川柳大会こぼればなし。

どうせ次号で大会の模様はご報告しますが出席の方々からたくさんのご感想がとどいてきます。

市川鱈魚氏から——白柳、水客氏は記憶にあったが、小松園氏は意外に若い感じ。一三夫氏はむずかしい人かと思っていたが案外気がさく。葉子さんは想像していたより優雅な人でホッとしました。好郎氏のご好意は忘れま

せん。

田中好啓氏から——中島生々庵氏のお人柄が、川柳塔のうらやましいほどの和の構成となっていることをまざまざ拝見。梅里さんとのぶお話はことのほか印象に残りました。克枝さんは初めての大会なのに、落ちついた披露をし、成績も上々でよろこんでいます。

★

お詫び——印刷所の新しい印刷機の入替えなどで発行日が四、五日遅れました。

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

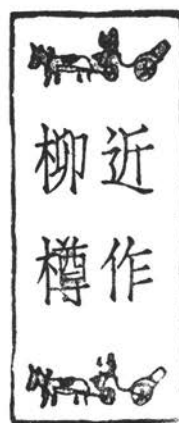
本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機関本食堂内

TEL 06 (991) 1181 内線 588



菊 沢 小 松 園 選

下関市 志賀木石

出る杭の覚悟も出来て先に立ち

今生の思い遂げたを不義と言う

小さくとも他人はこわいトゲを抜く

あかぎれを知らぬ息子と世を語る

近づけば五百阿羅漢鳴りひそめ

大阪市 黒田真砂

刃向えば心に残る傷の跡

イメージチェンジ出来そうにない春のパフ

明日を待つ心が開くみくじ吉

或る瞬間愛も打算の翳を持つ

広島県 岩谷二三枝

さすらいの涯を枯葉は地に縫る

余白まだ朱線引きたないファイト

きめてなどなくて鳥合が揉めている

働けるしあわせを知る靴すべり

今治市 蔦本昌道

猪口をもつ寡婦の器量に隙がなし

本妻をお義理のように旅へ連れ

意地だけは買われ老骨ねぎらわれ

押せば押し返されそうな思慕孤独

尼崎市 中谷利美

あなたにも建てられますに引っかけり

鉢巻をさせた銚子は酔わぬ酒

スキヤンダルどうであらうと好きな歌手

ガンになるならもうなっている煙草

竹原市 三宅不朽

美しく生れて風の中の葦

いく度も読む文ありきぼたん雪

劣等感たった二つの眼の置き場

アイウエオいろはにもある疎外感

大阪市 西本保夫

平社員思いなおして頭下げ
柏手も小さく打って五円玉
出し抜いて結婚してた年賀状
勉強のお札を貼ったまま居らず

竹原市 楠 貞 子

酒の値にふれず三カ日の爛
残火に似た落日の恋さびし
女なり母なり妻としてせわし
善人になれず小さな悔を追う

大阪市 堀 口 欣 一

新春対談こも松下幸之助
四十女やはり財布に鈴をつけ
松屋町社長夫人の襟がけ
二才児のもうハンドバッグ持たされる

岐阜市 市 川 鱗 魚

勇み足女房の知恵に頼りすぎ
露の藁見事もむごい過疎部落
スト賛否一升ビンが横になり

大洲市 堀 内 暁 風

回復へ恋も芽ばえた付添婦
繰越の赤字辻褃だけ合わせ
閑な人はたで見られる程でなし

松原市 守 屋 万 竿
値上げしたばかりと乗ってから気付き
春近く値上げ次々出番待ち
ボーナスの消えて綺麗に年を越し

諫早市 原 田 明 春

愛の鞭というゲンコツの痛いこと
寄付つゝのときだけ顧問と呼んで来る
安全を十円投げて頼んどき

大阪市 河 野 君 子

人間不信コンピュータを信じきり
賑わいを足袋の汚れに知らされる
老夫婦縦に並ぶ歩乱さな

東大阪市 宮 西 弥 生

出雲路初詣り(二句)

暖冬へ大山惜しみなく見せる肌
暖房車おきどころのない松葉ガニ
魔性すむ私を抱いてひとり寝る

大阪市 江 城 修 史

亀裂した愛を繕う糸がない
傷心をかくす瞳は空へ向け
逢うて来た証拠に瞳が燃えている

八代市 船 木 史 朗

この人も同じ言葉で慰める

地下足袋の今日へも矢張りコンパクト

元旦のせめて今日だけとがめまい

大阪市 小 谷 葉 子

許される嘘あり今日終る

女ひとりリーチをかけて描くもの

熟れ急ぐ果実哀しいつけまつげ

河内長野市 森 本 黒 天 子

もう死んでもよい年齢だと蔭ではささやかれ

戊年のえとにあやかると帯をしめ

呼吸してるだけへみんなが祝うて呉れ

竹原市 生 信 笑 子

時すでにおそし少女は病んでいた

一列にメザシはこっちにらみつげ

まがってはいるが私の歩いた道つづく

今治市 渡 辺 南 奉

波の音一ときわ高し孤にこもる

胸に火をともしたまの片思い

妻にまだ好きの言葉は言うてなし

島根県 堀 江 芳 子

奮発をしても粗品と書いておき

好きなよう寝れる今夜は洗い髪

よき人にめぐり会えたりペンを持つ

和歌山市 増 田 め ぐ み

初春の風にも白鳥静かです

人も去りおせちも尽きて昼の月

盛衰はとなり合わせか白いばら

和歌山市 増 田 次 章

籠の鳥俺はいやだよ軒すずめ

占いのトランプやはり味方せず

日の丸の想い出いつまでも消えず

松江市 村 松 醉 歩

子で泣いて働く手足しびれそう

鍵っ子が尖った屋根の家をもち

機動隊戦争ごっこあきました

竹原市 脇 本 政 己

サボテンのトゲなおとがる寒となり

雲一つ心のしみの如くうく

安いのをこころが手頃と広げられ

竹原市 岡 元 春 昇

ヘンクリを出そうか妻に似合う柄

叱っても母の言葉にあるぬくみ

三才を家中過保護のまま育て

七尾市 松 高 秀 峰

年頃の子にババママも遠慮がちな湯だな工事費一寸気にかかり両親の苦勞が晴着になつて消え

守口市 岸 本 豊 平 次

家計簿に挑戦してくる市場籠お雑煮が起こして廻る三ガ日いずれ又村を出る子の宮詣り

大阪府 和 田 痴 亭

花鉄空虚埋めてゆく孤独
困の中も女は炎えてゆきなまぬるいスープをけさも愛濁く

和歌山県 ふきあげ 虎 城

カルテの字読めない俺にまで隠す
ふんばったまま枯れ茄子の馬捨てる
8ミリの視野で空想カットする

鳥取県 林 露 杖

どの足もはずんで通る三カ日
譲られて席ほのぼのと暖かし
超えられぬ一線互に見つめ合う

米子市 増 田 竹 馬

古稀の春喜の寿へ挑む足がかり
プランコへ園児のボスが風を切る

掘炬燵やはり明治の肌に合い

羽曳野市 前 川 桂 馬

褒められて女房の筆と云いそびれ

頼りない音で賽銭落ちてゆき

お代りの水邪魔臭い顔で来る

今治市 大 本 バ ッ ト

一枚の賀状位いで済まぬ義理

名犬も駄犬もあって賀状の絵

引け前に電話が掛る共稼ぎ

今治市 真 山 国 彦

ボーナス日晚の馳走を撒餌され

オリオンと一緒に走る風呂帰り

主の無い蜘蛛の巣払う大晦日

今治市 今 井 松 花

裏の無い男でカッと腹を立て

日曜日同じ時刻に目が覚める

貫禄ははち切れそうな帯の辺

今治市 古 野 伶 人

夢伏せて嫁ぐ返事をするうなじ

ピラピラを付けてたこ焼立喰いし

油虫叩かれてから逃げはじめ

今治市 原 田 輝 親

師家の前背伸びするのを止めて出る
ぬかみそとくさし糟糠とも褒めて
俺でなきゃつかぬライター俺のもの

八幡浜市 別 宮 す き

二十年続く賀状のみあたらず
子の客にふりまわされた三力日
断絶の今日一日を犬と居る

広島市 楨 田 英 詩

岐れ道駄馬は思案の草を喰み
テストするマイクに雨が降りかかり
身から出た錆を拭うに酒をかり

島根県 梅 み ど り

かき合わす衿から冬がしのび込み
穴道湖の白波となる冬の風
帰省子を囲むこたつの出雲べん

羽咋市 三 宅 ろ 亭

一本の寒菊に見る抵抗権
ときたまに病氣するもの妻優さし
人生観変える積りで眼鏡換え

東大阪市 落 合 思 月

もめごとを知らぬ孫の目美しい
家もカーもいらぬ二人で親もすて

老残のささえに三人孫が居る

羽曳野市 麻 野 幽 玄

蟹を裂く美しき手も躊わず
切られてからの爪は不浄に扱われ
初詣小銭忘れたらしい札

新宮市 大 矢 十 郎

父さんも加勢おたいこ出来上り
電話する社長社員にせぬ笑い
行けばいく会に居そうな顔が居る

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

三面鏡みな別々の心持ち
折と酒出るで一日フイにする
生涯を助けた辞典のすり破れ

島根県 大 森 孝 華

真実がとまどう空虚の目に出合い
母になり母の墓前にひざまずき

岡山県 片 山 雅 子

米作り余ると知っても精を出し
でかい箱小さなケーキが顔を出し

笠岡市 山 本 柏 生

責任が重い大人の仲間いり
母の煮た雑煮の味で歳を積み

八尾市 高 杉 千 歩

時は金歩け歩けの列がふえ

テーブルを挟む会話の他人めき

神戸市 横 山 孜 孝

甲斐性が無くて真面目のように見え

パトロンと呼ばばヒモでも良く聞え

大阪市 花 田 繁 子

七円の孝行もせずしたつもり

早やばやと師走に水着のコンテスト

大阪市 藤 田 頂 留 子

すれ違う晴着に女の火花散る

米あまる他方は飢えている矛盾

札幌市 平 野 青 夜

割箸を口で割ってる江戸生まれ

サボタージュ暗い灯かげの子を思い

大阪市 阪 上 十 止 庵

自動巻までもとまって三カ日

十円でほぐれぬ五十肩のこり

大田市 藤 田 軒 太 楼

教養を積み雑犬としてはほえず

年寄は昔ながらの掘炬燵

今治市 伊 藤 一 郎

自慢の娘連れて歩いて金が要り

晴れ着著た妻の後から初詣で

岡山県 武 内 雅 堂

身動きのできぬ道行く車椅子

肩もんであげてるうちに好きになり

岡山県 目 賀 芳 月

うちの犬借金取りにまでなつき

ネグリジエと寝巻が同じ竿で和し

浦和市 吉 岡 茂

寿命尽く螢光燈もつかんとす

本堂はこちらになって車庫の上

松江市 大 峠 可 動

忘却のひとつとき心うなだれる

夢かくす心の壺の置きどころ

愛媛県 燈 本 満 子

幸福なムードでないと知るカメラ

付添が欲しい心の深いキズ

岡山県 武 元 柳 子

待たされる時間の長い隙間風

吊るし柿だんだんへって縄となり

島根県 中 島 英 子

しめ飾り仔犬の小屋も春がくる
和服着てミニの歩巾の下駄が行く

仙台市 平 野 光 道

信頼にかかわる知恵の輪もてあまし
休憩時間確保滞貨の中にいて

大阪市 河 原 林 比 呂 路

腹立ちが指に來ている煙草の火
持つものを持てば静かにものがいえ

宿毛市 山 本 窓 花

楽しみに育てた花に虫が付き
黙ってても人は貫禄つけてくれ

高槻市 山 田 ス ミ 子

汚柴した川も正月そのまんま
冬眠も出来ず熱帯魚餌をあさり

鳥取市 有 田 鹿 の 子

捨てたはずの故郷の賀状抱いて寝る
木洩れ陽の如く女の生きつづけ

岡山市 谷 森 和 風

二三人死なねば歩道橋建ちもせず
マスコミが末恐ろしい子に育て

高知県 山 川 勝 子

遺言状書けば病は癒え始め
お年玉も値上りだろうと孫の口

竹原市 簀 田 淨 美

恋なればこそお互いを庇い合う
あなたとの距離が伸びない縮まない

島根県 錦 織 文 子

長居して相談ほんの帰りざわ
上京を告げる墓石に娘と並び

島根県 志 賀 美 栄

ぴりぴりと胡椒のきいた嫁の味
ひとまわり大きくなって里帰り

和歌山市 田 中 正 夫

言い出せず察してくれず去ぬ未練
アルバムに父の見染めた母の顔

兵庫県 高 橋 近 江

吊革の隣りが転作話し掛け
紅一点静肅破った意志表示

鳥取県 川 崎 秋 女

出るくいは打たれる世間の風当り
親の夢子の夢のせてどんと燃ゆ

善通寺市 伊藤歌子

年賀状天国行きが又ひとり

池田市 石井文五郎

靴ひかる早ボートナスが出たのかな

鳥取市 近藤秋星

勉強のことは苦手で子に黙り

八尾市 飯田一治

雨音が静かに心の中洗い

東大阪市 斎藤三十四

初便り孫の写真も入れてくる

大阪市 田中多幸

クラス会子供になって語りあい

大阪市 今井隼人

便利さは裸で出られる電話口

大阪市 木村浊水

忘年会下戸幹事役買って出る

大阪市 松岡進

迷い犬当年とてももらわれる

寝屋川市 福富隆子

二カ月を痛み続けた歯を捨てて

和歌山市 吉野富子

タクシーへ命あずける心地にて

新潟県 高野不二

のらくらをなつかしがって年がばれ

大阪市 平井露芳

犬の声五十ホーンで鳴きつづけ

倉敷市 竹内翁童

ひと切れのカズノコ買える幸があり

松江市 津川紫吻

ガスこんろ夫婦多情な人と知る

守口市 樋口一峯

も一人の俺が現状承知せず

仙台市 川村映輝

疑がわず月から伝えるテレビ見る

大阪市 吉野志津

忙しい忙しいとパチンコへ日参し

大阪市 岡本まさひろ

屠蘇の酔い正月らしい顔にする

岡山県 本倉英峰

きれいだと言えば女つけ上がり

★

今月も全没が出ました。添削不可能の題材ではどうにもなりません。(小松園)



写真は故後藤梅志氏

ああ、梅志さん

清水白柳

一月十五日のおひるすぎだった。大手前病院の六階、梅志さんの病室の前まで行った処部屋がガラ空きだ、ハッと思って向いの病室へ入る付添婦さんに聞いたところ、昨夜亡くなられて今朝帰られたとのことでした。思った。

十三日に娘さんの明子さんから電話を頂いたのが十四日はどうしても手が抜けなかったで十五日になってしまったのだ。遅かったと悔んだものの仕方なくシヨンポリと階下へ降りた廊下で明子さんとバツリ会った。診断書をとりに来たとのこと一寸立話をしてすぐに玉出の自宅へ伺った。放心状態の奥さんを慰めて、北枕の梅志さんに心から遅かった事を詫びた。珠数を細い手につけた姿に句集の出版が間に合わなかったことが残念だったが、せめてもの慰めは、十三日に薫風さんと漢介さんが初校のゲラを見せてあげて下

さったことであつた。十四日に葉さんも御見舞に行つて居られるが、これが最後の柳人の面会になつてしまつたのだ。お見舞をお供えて知人への連絡もあり早々に帰らして頂いた。

十月十八日の「梅志句集刊行披露の会」のことは本誌十二月号に東野大八さんの筆で詳しく書いて頂いているが、あの会を催されることについて私が延期してほしいと申入れに行つたのは十月五日だったと思う。句集は早くても一月下旬か二月にならねば出来上らないのに、句集のない刊行披露の会は常識で考えてもおかしい、句集が出来たらお祝いの会を私等が催すからそれ迄延期したらどうかというのを申入れたが、梅志さんは頑として聞き入れない。常識ではそうであってもワシは常識でない事をする男なのだ、まだ君にはワシのことが判つていないと叱られた。そし

てあの会が開かれたのだが、今となってみれば、よくあの会を開かれてよかつたと思う。もし私の申入れに従つて会を延期されていたら生前に句集刊行の会を持つことが出来ず、私としては一生そのことに心の負担を感じなければならなかつたわけである。梅志さんの頑固さが私を救つてくれたことになる、いらぬオセッカイはくれぐれもするものではないと込みじみ感じさせられている。しかし心から喜んでももらったこともある。それは昨年十月十二日に開られた「路郎賞、川柳塔賞発表句会」の折に準優秀句「父の歳より長く生き父を識る」後藤梅志に贈る記念品を私が預かつて帰り、翌十三日に梅志さんのお宅へ届けに行つた時であつた。それこそ本當の偶然ではあつたが、十月十三日は梅志さんの誕生日だったのである。こんなうれしい誕生日はないと心の底から喜んで居られたが考えてみればこれが梅志さんが人生最後の最良の誕生日になつたわけでもある。

さて梅志さんの句が川柳雑誌にのつたのはいつ頃から調べ見た。昭和二十五年二月句会に初めて出席されて五句入選、そのうちの二句が私の選句であつたのも何か因縁のようなものを感じさせられた。そして二十六年、二十七年と句会に時々出席されていて、二十八年の四月に故梅里さんの推せんで不朽洞会に入会五月号の川柳塔欄に

筋かいの角が夜つびて眠らせず 作品

から川柳雑誌での活躍が始まったのである。

昭和三十二年十月二十四日に梅志居で「川柳西成支部」句会を開いてからの発展は目をみはらせるものがあつた。(川柳西成支部は支部長、土井文蝶で以前からあつたが句会活動はして居なかつた)句会は三十七年二月頃まで続いていて、その間に一年間の句会吟を集めた特集号を、三十三年、三十四年、三十五年と三回発行されているのも梅志さんの熱心さを物語っていると言えよう。いくら書いても思ひ出は尽きないが、私の頭に残っている句を抄記して御冥福をお祈りする。 合掌

後藤梅志句抄

― 自選百句から ―

海へ来て海のひろさに足を漬け
種牛のとりつとした瞳と出あい
俄か兩國旗のひもがまだ解けず
そよ風に造花くるつと向きをかえ
拌むまねして末っ子も膳につき
鏡台を男がもてばこけかかり
よちよちの鼠たみがめずらしい
悪人の居ないわが家で臍をだし
スイッチをひねるとはいやい油虫
毀れてるおもちやで床屋あやしてい
ものを云うと怒る大工で任かせとき

お元日猫もいっしょに歳をとり

母の下駄ゆがめままに古びおり

十二月パチパチはぜる物を焚き

― 四四年十一月号 ―

心臓に毛が生えていて死にはぐり

― 四四年十二月号 ―

金婚式をまゐに

初恋の日が金婚の日につづく

― 四五年一月号 ―

妻へ

一びきの姿 鯉鯉が生き残り

(最後の句は辞世句のような気がする)

梅志さんの死

橘 高 薫 風

後藤梅志さんが亡くなった。昭和四十五年一月十五日の午前二時に。その前々日、中尾藻介さん(梅志句集の出版に云うに云えぬ尽力を賜わった)と病院へかけつけて、昏睡状態の梅志さんの手に「秀句鑑賞と梅志句集」の初校刷りを握らせて、「もうすぐ出来上るんですよ。しっかりなさいよ。」と励ましたのだったが、梅志さんは薄目をあけて、それを見、かすかにうなずかれて、物云わんと

されるのだったが、もう口もきけず言葉にない程の状態だった。今これを書いているのは、本社句会場以和貴荘、後藤梅志追悼句会場の椅子にかけてである。席題に、梅・志・房(本名房三)の三題が出され、清水白柳さんが柳話で梅志さんの追憶談をしておられる。受付の机には製本をすませたばかりの「秀句鑑賞と梅志句集」がうず高く積まれてある。梅志さんの句会での作句態度、やや上向きに顔を挙げ、遠い眼指しになったり眼を閉じたり、煙草を喫いながら口を少し開けて醍醐味に浸っておられた姿を思い出す。早速著書を繙いて見る。巻頭に麻生霞乃、椋元紋太阿先生の序文と祝詞がある。霞乃先生は、序文に、「梅志さんは、責任観念の強い人。自信の持主で編集の仕事にも見落としがなく路郎からも信頼されていた人。何事にも筋が通らねば納まらぬ性質で「切目正しからざれば食らわず」の厳しさが働くので、一言居士とか、うるさ型のそしりを免れぬ損な人。然し、一から十まで損をせずに世渡りをしようとするみみっちい魂胆の人よりも、通かに愛嬌があつてよい。」という意味のことを書いておられる。先生に通じ一べんの美辞を賜わるとして梅志さんにとっては爽快な序であつたろう。秀句鑑賞のはじめに、「この鑑賞をよむ人のために」と題して、「植木には水や肥料が必要であるように、人間社会にも肥料、

すなわち脳のこやしが必要であります。川柳は脳のこやしです。もし、人間社会に、感謝というものがなければ社会は索莫たるものとなるでしょう。それでは川柳を覚えた甲斐はありません。この鑑賞の、文章や句を通じて感謝ということを味わって下さい。天も地も風物も、一つの感謝であることがよくお判りになるでしょう。」と書いておられる。にじなり句会を主宰しておられた当時、「恩借」という題が出た。今にして思えば梅志さんでなくてはの感の深い出題であった。当時、本多省三といっていた今の柳志さん（梅志さんが名付け親）や私やその他多くの初心の作家が育てられた。梅志さんの句は、その謡と同様に年季が入っていた。年季は歳月の長さだけでは身につかぬものである。その鑑賞の深さ、適確さと共に、これも今にして私に判りはじめたことである。眉毛の長い、鼻筋の通った面長の風格ある古武士のような、また南画にでも画かれていそうな容貌は、年少の頃から苦勞を重ねられた人生の集積を思わせられた。にじなり句会で梅志選を三度続けて獲得すれば褒美をあげましょうと約束をされ、それを私が果たした時、故食満南北翁の喜寿に書かれた貴重な色紙を頂戴したが、今は形見となってしまう。個人的な思い出は尽きることがないが、それはさておき、梅志さんは死を律することの出来た数少ない人ではな

ったかと思う。昨年五月、入院検査の結果数年前に手術をした前立腺癌が全治したと、医者に大鼓判を押された、その奇跡を喜んでおられたのだが、死因は癌の肺臓への移転であった。昨夏、著書出版を思い立たれ、秋に完成を目指しておられたが、種々の齟齬をきたして、出来上りは今日の日まで遅延した。それでも十月十八日に、病氣全快祝いを兼ねて句集出版祝賀の宴を開き、中島生々庵主幹堀口塊人、橋本言也、東野大八その他親交のあった柳人多数を招待、自祝されたのである。路郎先生は生前、「私が癌のような病いに取りつかれて命脈が迫った時は、必ず隠すことなく打ち明けて欲しい。仕残しては死ぬ仕事を片付けて悔いのないように死にたいからだ。」と仰言っていた。梅志さんも元旦を心おきなく家で迎え、翌二日、厳寒の頃には暖い病院に入っておく方が良さよいかと云って、医者のおすすめがあった訳ではないのに自分から入院をされたのである。四日に私がお見舞いをした時は、元気に喋っておられたのに、十一日には容態急変して意識が混濁した、十五日の成人の日はこの世を去られた。句集完成を目前にしながら。一月十五日は、例年寒気厳しい日で、奈良の若草山焼きも、強風の日には日延べをすることもある。夜空をこがして燃え盛る火を、私は、この年から梅志さんを葬う祭典の火と見るに違いない。

金閣寺を焼いて、その中に身を置いてこの世から消えた人間の死も豪勢この上はなかったが、梅志さんは、それに劣らぬ強く美しい火に送られながら昇天されたのである。

弔句

正しき死 その夜壮嚴 山焼かる
横縞の雪となりたり靈柩車

大久保彦左逝く

不二田 一三夫

知人が死ぬと「惜しい人をうしなった」というのがきまり文句になっているが、後藤梅志氏の場合は、ほんとうに惜しい人をうしなったとおもう。

もう二、三年生きてもらっていて、「川柳塔」を大久保彦左衛門のように叱ってもらいたかった。

一世一代の著書も手にせず、梅志さんはついに逝ってしまった。ばくが「梅志句集」をはじめからお手伝いしていたら、おそらく昨年には出来上がっていたのだが、ほんとにすまないと思っている。

最初、句集を編集からいっさい、やってほしいと頼まれたが、ご承知のように、ばくに

は月刊二誌をおずかっているうえに、自分の仕事もあって、お断わりするより手がなかった。

この相談をうけたとき、売るために、氏の句集へ『秀句鑑賞』の二本立てをすすめたのである。

『秀句鑑賞』を本にしたいとは、二年ばかり前に相談をうけたことがあった。しかし、著作権は川柳塔社のものか、どうか、ということになると、理事会にもかけなければならなかったし、いろいろ事情もあって、時期を待つように忠告したわけである。

『秀句鑑賞』を梅志氏にお願いしたとき、あのページは主幹か、それに準ずる人という声もあったが、何かのページを氏に担当してもらって、改題当時、あの一徹ぶりの鳴りを静めていてもらうのがネライだった。

こうと思えば、故路郎先生の病床のまくらもとても熱論火を吐く人である。ばくとも何度か衝突をした。しかし相縁奇縁とでもいうのか、わりとばくの云うことにはあまり逆らわない梅志さんだった。ばくも一本気だし、うるさいから負けていてくれたのかも知れない。

はじめのころは、「句点」や「読点」のうちはかたがわるいのでいちいちクレームをつけたものである。意味のない行別は勝手に直したり、ばくとしては一番、いじめた人だった。

酒を「呑む」という字は、全部「飲む」に書きかえた。それを「呑む」でないという意味が通らぬと云うのである。しかし、ばくは「飲む」で押し通したわけだが、出来上った句集を見ると、やっぱり「呑む」になっていた。梅志さんとはこういう人だった。

「川柳を大衆詩というなら、大衆が辞書をひもとかずに読めるもの」

ほとんど当用漢字のばくへ、梅志さんは徐々にはいつてきた。

「これなら高校生に読めますか」

「ムリですね」

「では、カナにしよう」

と折れてきて『秀句鑑賞』が後半読みやすくなったことは、ご承知のとおりである。

梅志さんは「詩」というものを大切にしたい人だった。尊父が俳人とかで、少年時代から文学を愛していたらしく、川柳にも一本筋が通っていたようである。それはプロに近いきびしさだった。

自分の句にも他人の句にもきびしかった。

川柳家らしい川柳家だった。たいていの人は本職が光って、川柳がそのかげにかくれるものだが、梅志さんの場合は川柳が生活の前に押し出されていたようにおもふ。

昨年の暮れも押しせまった三十日、ばくが起床するヒルごろを見はからって、電話がかかってきた。

「正月の二日に入院します。家が寒いので暖い病院で遊んでこようと思っっていますが『漫才』誌は、毎月のように十部送ってくださいよ、なんとかして有信新之助さんと協力して売りますからね、あんたにお手伝いできるのは、コレよりないので……」

こんな電話だった。梅志さんは、同人雑誌に対しては、ひじょうに理解が深く、たとえば「雅号ぶっちゃけばなし」にご登場ねがったときでも、「写真版代も要ったことだから、せめてその出費した分だけ雑誌を買う」と、万事がこうだった。

口先だけの人ではなかった。心と心をおつけあう人だった。やっぱり惜しい人だったなあ……。

よき作家としても、よき選者としても、川柳塔の大損失であることは云うまでもないが筋が一本通っている人がだんだんすくなくなくなっていく川柳界にも、梅志さんの死は大きなマイナスだともおもふ。

藤本礎山氏死去（鳥取同人）

一月五日、鳥取市生協病院へ入院、同十三日胃ガンを手術されたが二月八日午前九時四十五分逝去。十日午後二時鳥取市吉方、梅翁院で告別式。

梅志さんのこと

東 野 大 八

★柳 界 短 信★

▼東京都、近代文学博物館（二月一日から三月二十二日まで）で「近代の川柳誌展」が開かれている。

神田仙之助氏の紹介で、柳誌「大正川柳」と東京の「きやり」、「川柳研究」。大阪の「番傘」と「川柳雑誌」の表紙がパンフレットに出ている。

▼大阪府堺市の「広報堺」に堺川柳作家協会が紹介され、南北、水府、路郎先生のほか、川柳塔関係では好郎、摩太郎氏などの句が発表されている。

▼関戸宗太郎忌川柳句会が三月一日（日）正午から、小松市須天町会館で開かれた。

▼渡辺曉童氏（愛媛県同人）から、大陸巷談の「いぬどしだんぎ」に明治四十三年十二月生まれ小生脱落は残念と――還暦を自祝して――還暦の欲はまだまだ金と色――の句に、榎本映一先生の漫像を日本手拭に染めて配布された。なお新春早々新築落成祝い、一月二十五日には三番目のお嬢さんの結婚式、三月末には教育委員会囑託を辞任、いよいよ川柳に精を出すす力強いおたより。

▼不二田一三夫氏は一月に、漫才の小円、栄子。二月には島ひろし、ミス・ワカサ。暁・伸、ミス・ハワイ宅へ取材に走りまわり、相変らず忙しいの連発。

後藤梅志さんが亡くられたとき、社用で蒲郡にかけ、一泊して翌朝が座談会、この当日、梅志さんの葬儀があった。

梅志さんとは、奈良のいかるが荘の大陸同窓会が初対面であった。帰途薫風さんとともに天王寺まで梅志さんに同行した。三人で茶房で一ときを過したが、爾来、この梅志さんに一方ならぬ御愛顧を蒙った。

一徹で、古武士の風貌なところが、私の親父とウリ二つで、この人の典雅な文字のお便りがくると、坐り直して読んだ。

梅志句集と、奥さまとの半世紀にわたる金

後 藤 梅 志 著

（送料共五五〇円）

「秀句鑑賞と梅志句集」送本中！

お待たせしました。梅志さんは自分のこの句集の出来上がるまで頑張れず急逝されました。

だが「梅志句集」はこのように生きています。

秀句鑑賞にはあなたの句も活字になっていますから、ぜひご覧ください。お申込みは、川柳塔社梅志句集係へ。

近 詠

須坂市 高峰 柳児

内職で二号落目を噛みしめる
ライターの好意鼻先へまとも
初孫へみついで生甲斐を見つけ
弱音はくときサングラス引立たず

大洲市 米 沢 曉 明

体操もせずに指圧をたよりきり
閑人の庭にペンペン草が伸び
都会にも善人がいた子の便り
誰もいないけど小声で話すこと
ナフキンをしかと挟んで借衣裳

今治市 月 原 宵 明

ご先祖は誰か知らぬが灯をともし
嘘と嘘げんまんをするバーの隅

和歌山市 秋月 宏方

人間ドックここで部品の点検す
どこへどうおちつくつもり雲は行く
鏡とてやはり笑顔を映したし

名古屋市 長谷川 鮮山

つつましく咲く水仙に似た気だて
下積みに堪え得た人事異動欄
頼られる身になり人の中のをれ

今治市 長野 文庫

肩書を外せば俺と同じ年
業界の鬼趣味の座の隅に居る
鍵束を持っているので気が疲れ

猫と暮らして二カ月

松川 杜 的

借りてきた猫そのままに小さく居る
置物のようにテレビでかしまり
泣き声で猫の心が読めはじめ
叱られたその夜を俺に寄り付かず
ちん入の猫とも食事分か合い
昨日盆栽今日は紅葉を喰いちぎり
本能は素晴し小雀しとめて来

独特の臭いへ梅雨が思われて
信心の妻合掌で捨てに出る
振り向いた哀れな顔が未だ残り

ある日小猫をもらいました。とても可愛いらしい三毛で、家中が一時にぎやかになり、彼女にとっては仕合せな日がつぎきました。でも人間とは薄情なもの、次々に起きる被害と、身の世話に二カ月とはつづかず、またある日、遠いところへ捨てられてしまいました。

入会のチャンス 3月新学期

三
大
モ
ト
ー
（短期速成
費用低廉
講師陣充実）

あなたも奇術師になれます
(規則書贈呈)

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目

☎ 542 誓 得 寺 内

関西奇術教室

TEL (271) 7128

川柳徳川記 (十二)

富士野鞍馬

喜と出ている。

この御三卿は、御三家、(尾張・紀州・水戸)と並び最高の格式で、見附の規定に、「御三家方御三卿方日光御門主二者、番士一同薄縁下座台ヲ放平伏、三ツ拍子木惣下座」とあり、

たまさかに浅草見附三ツ打ち (四五二四) 木を入れて二重舞台へ見附下り(二〇三三)と川柳に詠まれてある。二重舞台は劇場用語であるが、右の薄縁敷台を洒落たのである。この田安家の初代宗武が「川柳評万句合」に入選して

けいさんが袋に入ると爛が出来 朗元信(三) という句が採録されてある。(岡田甫発見) 宗武は国学者で歌人であったから川柳も作ったのであろう。けいさんは文鎮のことで、それを袋に入れというのは、將軍からの拝領品であらう。書きものを終ってちよっと一ぱいという文人らしい殿様であった。

豊後節

豊後節が流行して、その影響で相對死(心中)が多くなったので、吉宗は、元文四年(一七三九)それを嚴禁した。その頃の落首に「豊後米八斗二升(法度にしよう)と触れられて、菰をかぶるか宮乞食(宮古路)めら」

というのがあった。川柳には

吉宗

吉宗は、紀州家の三男で、二人の兄が死んだので、二十二才の時、紀州家を相続した。それから十二年後、三十三才の時、七代將軍家継がわずか八才でなくなつたので、呼び出されて、享保元年(一七一六)八代將軍となつたのである。

中興の英主といわれているが、その前の、五、六、七代が凡庸であつたので、そういわれているのである。享保改革政治の推進力として、大岡忠相は有能な官僚であつた。

出版を統制して、好色本を禁止し、医薬、産業関係のものを奨励した。享保七年(一二二)十一月の出版条令の、

「何書によらず、これ以後新板の物は、作者ならびに板元の実名を奥書き致させ申すべきこと」

御三卿

吉宗は長男家重に將軍職を譲つたが、家重よりすぐれた次男宗武を「田安右兵衛督」、三男宗尹を「一橋刑部卿」として、大名にせず城内におき、ついで家重も次男重好を「清水兵部卿」として、これを「御三卿」と称して、自然に將軍の二、三男がこの三卿名跡をつぐならわしになった。後、この三卿の一橋家から將軍の世継が、十一代家斉、十五代慶

豊後節一流乞食語り出しと詠まれている。(四二)

相對死の敵罰については、

日本橋右を背くと左だぞ(三二二)

おっかならしい札のある日本橋(三〇三)

日本橋南詰西側に制札が立ち、心中未遂の

男女は、その向い側で三日間晒されて、非人

に下げられたのである。

また私娼、散娼を嚴禁して、その女達を吉

原へ送り込んだので、

風呂や泥水よし原へ流れ込み(二〇七三)

という川柳もある。これは湯女を詠んだので

ある。

尾張宗春

尾張宗春は、八代將軍自選候補であつた

が、吉宗が將軍になつたので、その不滿か

ら、吉原姿海老屋の春日野へ通ひ、枚将を尽

し、外山屋敷に、東海道五十三次の模景を造

り、春日野を身請けしてそこに居たが、元文

四年(一七三九)一月、蟄居を命ぜられた。

吉原通ひに籠中製の笠を冠て行つたとい

うので、川柳にも多く詠まれている。

鯉鉢はばらふの笠へすき通り(三三三)

春日野は四ツ入りとい客を持ち(二七八)

春日野は東海道を八文字(三六四)

鯉は尾張侯、ばらふは籠甲、四人とないは

御三家をいうのである。

榊原政岑

尾張宗春蟄居から二年後の、寛保元年(一

七四一)には、姫路の榊原政岑が、十代目高

尾を身請けして蟄居を命ぜられ、嗣子政永は

越後高田に転封された。それも、

大門へ櫛の這入る賑やかさ

通ひ車とうきなたつ御放埒(二〇三九)

請出した後は五丁の車留(五二六)

くれないは櫛へ植てかくれなし(傍三三二)

御隣はかがさまかへと高尾開き(拾七三〇)

などと詠まれている。「車」は榊原の紋源氏

川柳塔社常任理事会

一月二十七日に大阪在住の参事、理

事が心斎橋の大成閣で懇親宴開催、本

年の健闘を誓ひ合つた。

二月四日は定例理事会。本年度二賞

の選考委員決定。同人吟は生々庵、多

久志、好郎、春巢、葉、小松園、水客

諸氏。近作柳樽は白柳、古方、薰風諸

氏(没食氏辞退) 同人吟に異色水客氏

の加入は心強い。

出席—生々庵、水客、静馬、薰風、

多久志、好郎、一三夫諸氏。

—八時開会。

車に利かせた趣向である。吉原大門に入るのに白昼行列を整えて乗込んだそう、高尾は池の端の中屋敷に同居したので、隣りは前田侯であった。

この高尾は高田まで行つて、政岑は寛保三年(一七四三)に死んだので、尼になり寛政十一年(一七九九)八十四才で往生したので、

うんのよい女郎越後で尼になり(安二鶴一)という川柳がある。

新芯気鋭

いつまでも細く書ける硬質サインペン

黒・赤・青

1本50円

ライオン

ジェットペン

福井商事株式会社



「叱る」

桜川不水選

節廻し師匠舌打ちして叱り
家光を叱って彦左名を残し
叱っても本氣にとつて来れぬ孫
寝るまでの予定に叱ることがあり
舌打ちで叱る板場で鯉跳ねる
狢犬の目は叱られてゐる不足
根性に負けて叱らぬ親になり
叱られた奴に付き合う苦い酒
叱られて出てゆくドアに引^りき
叱られて出た子へ小繰戸開^きて寝る
叱責を予期し初手から弁解す
思い出は三八銃の最敬礼
警官に叱られ髭まで下を向き
叱られて馬鹿見た上に留置場
叱られる前に打つ手を考える
叱ったら猫の髭みな刈^りちまい
叱られに來てはめられて臍に落^ち
仲裁が来ぬので大声で叱り直し
叱らない親父に反抗期がすねる
叱られる予感^は父のちよつと來い

魚山 雅堂 白汀 新之助 紫吻 鱗魚 英子 素身郎 初甫 扇水 七面山 文三郎 正夫 誓二 露杖 大吉 南奉 玖孝 トク子 利美

叱られずにすまそう体力^ですり抜けよう
ママさんにパパ叱られてゐる不思議
叱られた初産の呻きを笑い合い
叱つてる最中電話のベルが鳴り
叱る母よりも笑顔の父恐い
叱られる期待外した太ッ肚
駐在へ叱られにいく靴磨く
叱るのが適役叔父を呼びにやり
叱られた涙しみ込む舞扇
不器用に叱つて父は見直され
叱る氣が哀願になる反抗期
佳
子を叱るコツ長男に教えられ
叱られて來てから寒いペンキ塗り
結論を賞め独走を叱るとき
子を叱るその口少し紅がはげ
叱られたことも嬉しい故郷の道
叱られている背ヘライバル意識^も
孫がまだ出來ず手紙で叱られる
叱ること忘れムスツと父がいる
叱られたので枯草へ火をつける
叱られておんな一人の影を踏む
人
叱られるチャンス新妻考える
地
民主々義叱る立場に嫁がいる
天
嫁姑叱る隙間もない平和
道雄

古方 里風 近江 バット 藤波 曉明 奇童 軒太楼 春日 柳子 章雅 季贊 雅堂 代仕男 隆子 秋女 芳仙 英詩 可住 宵明 静步 千翁 正朗

パン

山川阿茶選

軸
子を叱るにも含みある論しよう
パン食になじまぬ祖母の紀州粥
パン食へ家計簿異議を申し立て
残業を励ますパンの紙袋
屑パンをついばむ鳩の味とわず
見られてる娘小さなパンを選び
アンパンで孫と二人の昼がすみ
戦後派はナンバのパンの味知らず
米売ってパンをかうから余つて來
パン食でもやしのような子に育ち
パンちぎる指が器用なトルコ石
蒸発の妻をうらんだ今朝もパン
捕虜四年パンの重さも目で計り
パン二食腰にぶら下げデモの旗
共稼ぎ早出の方がパンを焼き
パン食に馴らそう貰^りて來た小犬
サンドイッチ妻耳だけで満腹し
今朝もまたパン一切を喰う間なし
日曜はパンから解放された膳
富子 利美 文三郎 代仕男 英子 綾女 不二 八郎 芳仙 魚山 弘朗 里風 扇水 いわを 素身郎 玖孝 正夫

課 題 吟

家風とは何ぞパン食折れあわず
 二切れのパンでパパさん追い出さ
 七草フン2DKは今朝もパン
 館パンを袋のままで出して昼
 パンに尾を振る犬なるか犬なるか
 下げたくない頭をパンが下げさ
 パンすらもあるやなしやの村に生
 草野球パンで優勝祝いする
 ママパンは英語でしようネオ
 お茶漬^{ちまづき}にコーヒへパンを漬
 朝食はパン新妻を寝かせとき
 生涯をいため続けた盗みのパン
 先生も給食のパンそつと捨て
 叱られて涙でパンがぬれている
 猿の目は遙かにパンを呉れる人
 野良犬の鎖は無くてパンに飢え
 山吹雪くパン一片で救助待ち
 パンに事欠くもしらずに庭の梅
 トースター我慢も限度のパン跳
 風上にパン焼く工場のある小駅
 パンと水巨匠もそんな時があり
 天 地
 愛の巣にパンの計算洩れがあり
 軸
 ポリウムとコストおやつはパンと決め

空虚なる女土曜の夜をみだれ
 自家用車妻子が待つてゐる土曜
 週末の雪にスキーや派手に出る
 土曜日に吹きだめられた忙しさ
 土曜の夜晴を信じてクラブ拭く
 半どんをきちんと仕舞ういい課長
 土曜日曜いいなゆつくり寝られ
 明日日曜えんやんかと深夜視る
 土曜日は待たれる彼氏の定期便
 土曜日がハンドンでない彼を待ち
 「土曜日のこと」何やし
 土曜日の午後が楽しい若さ持ち
 暮仇がブラリ来そうな夜土曜
 土曜半ドンパフ叩きあう更衣室
 土曜日へどつと仕事をもちこまれ
 土曜からはずんでみがくスキー靴
 ニコヨンへ頼な土曜の退社ブル
 サラリーと重なり素敵なこの土曜
 土日のプランの旅も雪となり

「土曜日」

小西無鬼選

土曜日も残業してる初老組
 真直ぐに帰るに惜しい土曜の夜
 土曜日の女を男飼育する
 土曜日の手形へそくり掻き集め
 化粧室いそいそ土曜の紅を引き
 土曜日も汽笛は同じ音で出る
 土曜日パパも一番好きと云う
 土曜日は少し濃目と云う化粧
 土曜日を妻の電話がたしなめる
 土曜日の期待にはずむ旅靴
 土曜日の背中へ愚痴を聞いて出る
 土曜日の電話お花をやめさせる
 ネオン灯くまでを土曜日もて余し
 土曜日の団地へパパの重い足
 土曜日から役所の窓は締めた儘
 スモッグをよけて土曜日日曜日
 土曜日と決めた大安の日を知らず
 解き放たれた家畜にも土曜似る
 土曜日の残業脱線して帰る
 土曜日の午後年令の差で別れ
 言訳の土曜はまわり道ばかり
 ホステスとして土曜日へ身構える
 土曜日は恋する人のためにあり
 人間に還る土曜の影法師
 土曜日は恋する人のためにあり
 人間に還る土曜の影法師

初歩教室

— 題「早」 —

本田 恵二朗

句の中に句主が生きている句は素晴らしい。
句主が生きているということは、句主の感動が、ほどばしついているということでもある。
句主のほどばしる感動の波は、それを読む者の心へ、快い響きとなって伝わってくる。そんな句を生みたいと私は希うばかりか、この教室の仲間、それを求めることしきりである。親愛なるこの教室の仲間達の、感動の波に吞まれて、私はおぼれてみた。
簡単な叙法で、大きな感動の波をたてるということは、なまやさしいことではないが、我々川柳人は、それをやらねばならぬ宿命をもっているのだと私は思う。そのためには、大きな努力と精進とが要求されるであろう。そして、回を重ねる毎に、あなたも私も共に進歩の足跡を残してゆかねばなるまい。
さて今回は、誰れかの句をとらえて、それ

を練って、練って、練り上げてみることによ
つて、お互に考えたり、反省したりしよう。
残月を背に早出の霜を踏む
誓二
これでよいのだが、この句境から次のような
句が生れてくることも知って欲しい。
(残月に早出の小径みちびかれ)
デパートはひと足早く春を売る
比呂路
(商魂がひと足早く春にする)
すばしこいもう坐つて旅行すき
志津
(席二つ素早く取つた旅行すき)
若かつた幾年月の金婚式
一休
(あつという間に来たような金婚式)
猟銃を磨いて早寝したちゃん
新之助
(念入りに猟銃磨いてパパ早寝)
早起きは自己の天職早寝する
竹馬
(天職を愛すればこそ早寝する)
早産の児がガラス越しうごめいて
保夫
(早産の吾子よ育てとガラス越し)
早引をして川柳の席におり
綾女
(早引が句座で鉛筆なめている)
口早に話す長距離電話口
富子
(口早に長距離電話ががなりたて)
新妻が来てから仕事早じまい
一登
(新婚の当座うれしい早じまい)
世の中は一にも二にも早い勝ち
生仏
(早いもの勝ちの浮世へ追いつけず)
まだ早いよと言いつつ目ぼしはつけてあり
満津子

(まだ早い早いと目ぼしつけており)
式挙げて三月目でしたママとなり
八郎
(式挙げて三月目赤ちゃん抱いてくる)
早退の奴が揃つて牌囲み
致孝
(早退がトンナンシーペイと席を決め)
気の早い真冬水着のフアッシュョンショー
富士
(水着ショーとは小雪が散っている)
早とちり引込みつかぬ仕儀となり
露杖
(早合点引込みつかぬ苦笑い)
雪の中に灯ともるみちのくの早春
光道
(雪が灯をはじくよみちのくの早春)
早合点されて言訳言いそびれ
正夫
床柱に座つた早々肩がこり
進人
日曜に限って子供早く起き
三十四
早合点の一人が会議ませかえす
静観堂
早いもんですなと一周忌拜まれる
多幸
すったもんだ人生最早秋の暮
近江
返盃の早き課長のお手のうち
英詩
早咲きの梅に出かけて風を引き
大吉
舌の根の乾かぬうちに早や汚職
勝子
年寄りの早起き日曜もて余し
頼次
早手廻した気が後手に廻つた
美代
俸せが早よう来過ぎた日の不安
儀一
スピードスピード結婚早や離婚
顔を見てスイッチ入れたらもうできた
繁子
なにごともし早いづめの世に疲れ
秀村

早耳に聞けば上手にとぼけられ
年越した縁談早々にハッパかけ
早晩は墮ちるであろうように墮ち
次に佳吟をご披露して、作家たちに、喝采を
贈ることにしよう。

早起きで稼ぎ早寝で子沢山
親の目にまだ早過ぎる娘のデート
早いとは言えぬ余生へ種を蒔き
早合点小さな悔をまた残し
早春の匂いを嗅いだ今朝の雨
まとまるも早い男の飲む話
据えかねた肚早々と来て坐り
早仕舞うらしい仕入れがみんな捌け
早春へわが足音を高くする
出世する早さへ敵の数もふえ

※

故路郎先生は、
—命ある句を作れ—と言われた。
故三太郎先生は、
—句は自分の子である—と言われた。
私の最高に尊敬していた両先生の、この言
葉を、私は座右の銘としている。そして
路郎先生も、三太郎先生も、私の家に泊って
下さり、大いに歓談をしたうれしい思い出を
もっている。その客間には
路郎先生の、
『俺に似よ俺に似るなと子をおもい』
の句が掲げられている。

濁水 茂美 肖二 喝采 三平 利美 柳子 すすき 秋女 慶彦 史朗 初甫 和風

三太郎先生の、
『わが上に屋根のある春雨の音』
の扁額が掲げられている。

両句共に、私の客間の文机で、親しく染筆
下さったものである。

師の句を、味読することは、楽しくて、勉
強になり、大きなプラスとなる。先輩ペテラ
ンの句も同様に、立派な参考書となってくれ
るものだ。当教室の仲間達が、こぞって、師
や先輩の句を、熟読玩味されることを願って
止まない。

三月二十日メ切一題「縁」——(五月号)
四月二十日メ切一題「雨」——(六月号)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二
七一一 本田 恵 二朗

きんぴゅう

本多 柳 志

◇デパートのコーナーに若い男女が目の色を
変えて集り群っている。「コンピューターが
貴方の結婚相手を見つけて呉れる」んだそう
である。世は正にコンピューター時代であ
る。経済や政治の問題から人生のなやみ、病
気の診断まで凡てを立ちどころに解決してく
れると云うのであるが、果してそうであろう

か。コンピューターに解答を出させるために
は解答を出すために必要な色々な条件を、先
ずコンピューターに記憶させる事が必要であ
って、其の条件になるデータを色々と与えて
やるのはやはり人間であることを忘れてはな
らない。記憶させるデータが不完全で不正確
だと、解答もまたいいかげんなものになるの
であって、男が子宮外妊娠になったり、馬券
の予想が外れてそれこそほんとの大穴が出た
りするのである。

◇コンピューターが過去のデータの処理に
は恐るべき偉力を発揮して、より正確な統計
資料を提供してくれるのは、矢張り記憶させ
るデータが広く正確且完全だからであろう。
複雑微妙な多くの要因や感情などによって動
かされる、株価の動きや馬券や宝くじの予想
まで、的確になし得るかどうか、とくと吟味
してかかる必要がある。自分と云うものを
離れて大事な配偶者までを、コンピューター
にたよるのは全くだうかと思う。馬券や宝く
じまで予想出来たのでは、も早やギャンブル
としての面白味もなくなってしまうだろう。
試に路郎賞や川柳塔賞の選定を、コンピュ
ーターにやらせて見たらどうだろう。折角選者
が苦心さんたんした名句が、全部が全部没に
なると云うような、悲喜劇が起るかも知れな
い。

落選をコンピューターがはじき出し 柳 志

大 萬 川 柳

「国旗」

入選発表

選者 清水白柳

投句総数 五百八十句
入 選 六十四句

お子様ランチの日の丸へ子は動かない
旗日また増えたが旗はまだ買わず
祝日を国旗どころか寝てしまひ

高石 好郎

具塚 つき子

旗日また増えたが旗はまだ買わず

天笑

祝日を国旗どころか寝てしまひ

素郎

演壇は国旗背にしてホラも吹き

和泉 東天紅

万国旗となりは知らぬ国の旗

素郎

本日休業国旗を立ててから出掛け

松原 史好

やっと子宝国旗でも掲げたい気

岸和田 きさ子

還らない息子の顔がある国旗

大阪 慶之助

日の丸を立てねば作業出来ぬ海

竹原 不朽

入選発表

選者 清水白柳

投句総数 五百八十句
入 選 六十四句

国旗立つ今日パパがいるママもいる
アイロンをかけたような国旗立て

羽曳野 選玄

外遊をしてから国旗忘れてず

一舟

赤旗を振って日の丸忘れとり

生 長

他所はもう出てる国旗へ子を起こし

住

万国旗見れば日の丸まずさがし

青 香

新興国の方が鮮やかな国旗

夫

必勝の国旗ダンスにまだ残り

朗

アメリカの国旗が月でしゃちこば

神 戸

安保デモの渦見おろして星条旗

大国の名だけを当てた万国旗

祭日は市バスの旗に教えられ

アンテナの数ほど国旗立てもせず

仙 台 光道

安保デモの渦見おろして星条旗

笠岡 忠三

大国の名だけを当てた万国旗

大 阪 柳 志

祭日は市バスの旗に教えられ

大 阪 準 人

アンテナの数ほど国旗立てもせず

大 阪 繁 子

旗日に旗出さぬ不思議な日本人

笠岡 要次

靖国に来てと国旗にささやかれ

大 阪 比呂路

日の丸のよごれいとわず捕鯨船

下 関 木 石

コケノムスあたりで国旗風はらみ

倉敷 扇 水

沖繩の子も日の丸がうまく画け

大 阪 大 吉

傾いた軒に律義な国旗立て

守 口 静 歩

国旗出す明治の顔が話しだし

富田林 きはち

日の丸を拝む祖父母を不思議がり

八 尾 鬼 遊

日の丸を大きく画いた男の子

倉敷 素身郎

電気製品揃え国旗はまだ買わず

岡 山 康 明

校庭の孤独雨の日の国旗台

大 阪 章 雅

子の方が国名を知る万国旗

大 阪 旅 風

探したらどこかに仕舞ってある国旗

高 槻 静 馬

官舎街さすが旗日を忘れない

美 禰 弘 道

日の丸を持つとパンザイしたくな

倉敷 三林坊

新しい国旗もさげてゆく移民

象の目の細きが哀れ万国旗

日の丸へまぶしそうなるつるし柿

米 子 千 代

元旦の空日の丸のために澄み

宝 塚 ゆきを

昭和元禄国旗に遠い子に育ち

駅に来て祝日気づく国旗なり

紀元節だと譲らず老父国旗出す

岡 山 久米雄

学校は休み旗出す役があり

支那事変からの国旗を今も立て

日の丸の折目に家風こぼれてる

倉敷 千 翁

日の丸の折目に家風こぼれてる

倉敷 千 翁

日の丸の折目に家風こぼれてる

日の丸はあなたの国としてなびき
よせ書きの国旗くり返してはなら
ず

大洲 曉明

四五枚は国を知らない万国旗
戦争ともうかわりのない国旗
日本中何かといえは万国旗

大阪 一栄

クレパスのはじめは日の丸の旗を
画き

休日忘れず国旗出し忘れ
両隣見てから立てた国旗です

倉敷 恵二朗

日の丸がほんとに好きで老父達者
日の丸が孫の賀状にひるがえり
嫁支度国旗忘れぬ父である

小松 芳朗

寄せ書きの国旗は母の宝もの

岸和田 きさ子

北西の風に国旗のいい姿

大阪 阿茶

クレヨンの国旗あっち向きこっち
向き

大阪 柳志

日の丸の売場デパートでも迷い

倉敷 素身郎
風呂敷に一度はなっていた国旗

人ノ句

藤井寺 吸江

自家用車持って国旗のない団地

地ノ句

大阪 新之助

色褪せた国旗は出さず買ひもせず

天ノ句

大阪 金三

国旗立ててキヤッチボールへ連れ
出され

選者 吟

国旗ずっと肩を並べて会議すむ

昭和四十五年度

ベストテン (二月現在)

- | | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 一 | 素郎 | 六、〇 | 堺 |
| 二 | 千代 | 五、〇 | 米子 |
| 三 | 静馬 | 五、〇 | 高槻 |
| 四 | 吸江 | 四、五 | 藤井寺 |
| 五 | きさ子 | 四、五 | 岸和田 |
| 六 | 扇水 | 四、〇 | 倉敷 |
| 七 | 千翁 | 四、〇 | 倉敷 |
| 八 | 恵二朗 | 四、〇 | 倉敷 |
| 九 | ゆきを | 四、〇 | 宝塚 |
| 一〇 | 曉明 | 四、〇 | 大洲 |

- | | | | |
|----|-----|-----|----|
| 一一 | 天笑 | 四、〇 | 堺 |
| 一二 | 金三 | 四、〇 | 大阪 |
| 一三 | 日満 | 四、〇 | 鳥取 |
| 一四 | 新之助 | 三、〇 | 大阪 |
| 一五 | 一栄 | 三、〇 | 大阪 |
| 一六 | 水客 | 三、〇 | 大阪 |
| 一七 | 青香 | 三、〇 | 堺 |
| 一八 | 可住 | 三、〇 | 篠山 |

昭和四十五年度第四回

「急行」 五句以内

第五回「良心」 三月二十日
締切 五月以内

投稿先 締切 四月二十日

大阪府高石市高師浜三丁目五一六
郵便番号 五九二

川村 好郎

★第十七回「大萬川柳大会」は、柳友各位のご厚情により、本年もまた盛会裡におわりました。厚くお礼申しあげます。米子からはるばる林瑞枝さんと八木千代さん。倉敷の小野克枝さんに岐阜の市川鱈魚氏と、遠来の

- | | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 一九 | 幽玄 | 三、〇 | 羽曳野 |
| 二〇 | 弘道 | 三、〇 | 美福 |
| 二一 | 史好 | 三、〇 | 松原 |
| 二二 | 好郎 | 三、〇 | 高石 |
| 二三 | 素身郎 | 二、五 | 倉敷 |
| 二四 | 柳志 | 二、五 | 大阪 |
| 二五 | 阿茶 | 二、五 | 大阪 |

以下略

★選者のご出席に、大萬川柳をより盛会にしていたきましたことを誌上で重ねてお礼申しあげます。女流作家が四名も選者としてご出席いただき、正に錦上添花を添えました。

— 大萬川柳会 —

季節料理・折 詰

大萬

阿倍野区松崎町
TEL 623 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 240 9184

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生は一月十六日後藤家を弔問、十七日は葬儀に参列され、会送の柳人多数になつかしく迎えられた。形水・栗阿氏と薫風が上六駅までお見送り申し上げた。

▼東洋樹川柳賞受賞者が柳都主幹の大野風柳氏と決定した。指導者層の中で最も活動的で、句に文に柳界に新風を吹き込んで来た累年の功績により、第三回目の東洋樹川柳賞(賞金五万円也)の受賞となった。時の川柳社賞は卜部晴美さんが受賞。裏方の功による。受賞記念川柳大会が四月十二日神戸で行なわれる予定。

▼昭和四十四年度柳都賞は、同人の部石上弘法僧、会員の部佐藤岳俊、渡辺伸児の諸氏がそれぞれ受賞された。

▼第十九回西大寺会陽川柳大会は二月二十一日(土)

午後六時から西大寺鐘紡労働会館で開催、大森風来子、延永忠美、岡村久志良、本田恵二朗、池田あや子の諸氏が選をされ、忠美氏揮毫の川柳手拭が記念品として配られた。

▼川柳きやり吟社創立滿五十年周年記念句会は昭和四十五年四月五日(日)午前十一時から千代田区麹町一の四半蔵門東条会館で開催、兼題、仕合せ・空港・器用・屋根・良妻・豪遊、席題四題、各題二句、締切り午後一時、投句は千五百円(川柳きやり五十年史呈)封入の上、三月十五日までに東京都千代田区東紺屋町二七野村圭佑宛。

▼噴煙吟社(熊本市)二十周年記念事業は、さきにインターナショナル誌上柳柳大会を公募したが、記念川柳大会、自選句集「草千里第二集」出版、噴煙誌二十

周年記念号発行など次々と企画されている。

▼噴煙創立二十周年記念祝賀川柳大会は三月一日に予定されていたが、吟社主宰の瀧明氏急病のため開催日後日決定。

▼平安川柳社昭和四十五年度役職分担が決定、理事長福永清造(会計部)、副理事長北川絢一朗(総務部)西沢青二(同人部)、常任理事堀豊次、田中秀果、柱ひろし(句会部)、坂根寛哉(編集部)、井上高雄(発送部)

▲昭和四十五年度柳都役員が決定。総括(主幹)大野風柳、編集部(長)佐藤加津郎、句会部(長)山田加勢夫、会計部(長)古谷月勢、渉外部(長)大野風柳指導部(長)山田加勢夫。

▼大阪文学学校会館建設の募金が行なわれている。作家、詩人、評論家、研究者サクル、同人誌メンバーらが交流する集會室としての機能をもたせるとも、資料室や図書室も設け、文学活動のセンターとしたいと考えて、鉄筋コンクリート造り、延面積四百五十平方米、三階建、募金目標総額五千万円、一九七二

年十二月完成予定、募金は一口千円、大阪市西区阿波座北通二の二六、大阪文学学校会館建設委員会宛。

▼平安二月号の特集「川柳誌を展望する」で、大島無冠王氏が川柳塔をとりあげ、「柳誌に溢れるその思想や句風も故麻生路郎の血がまだ脈々と搏つているようである。細かくみれば、その編集や活字の大きさの配列までもが、師路郎であり師の大きさである。また、その遺鉢を嗣ぐ中島生々庵をはじめ、主脳同人の人達の、さらに「塔」を築くに営々たる姿こそ、美しい人間の発露である。」とこの上ない好意を以て論じておられる。

▼川柳いずも一月号は、弘津柳慶、原独仙、三宅不朽津川紫吻、堀江正朗、芳子夫妻、王紫の諸氏の執筆でバラエティに富んだ読物となった。表紙に路郎の「凡聖一如」の句が掲げられている。

▼きしせん第二十回大会特集号で、清水白柳氏は「選者の心がけについて」を執筆、岸和田川柳大会当日の講演の要旨で、甚だ好評の読物、一読をおすすめす

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

多々薬品



▼ひかり川柳会二十周年大会の寄せ書きを頂戴した。岡橋宣介、伊東静夢、海士天樹、大出康徳諸氏が弘前の雪の美しさに触れられる。

▼川柳「そのだ」十周年記念大会は三月八日(日)正午から伊丹文化会館(阪急伊丹終点北へ百米)で開催兼題天使(前川千津子選)売れっ子(杉本孝子選)、旅(藪内千代子選)、副賞(古下俊作選)、記念(橋本言

也選)各題三句、投句は百円封入の上、伊丹市美鈴町二丁目二一高橋光女宛。呈賞一位から二十位まで。

▼川柳句集「想い出」が昭和四十四年十月一日、函館市青柳町十八の十一函館川柳社から発行になった。著者の北村白眼子氏は序に、

「自叙は憂し酒徒の貧民の凡詩人」の句を掲げておられる通り、酒の好きな歯科医でいらつしやる。難病快癒の自祝の意をこめ、「亡妻への手向け」との意もこめて出版にふみ切られた。酔眼に見る頼りない友ばかり

本當の禁酒を妻に言わず

虚心坦懐に暮れたり冷奴で遺族もホッとされている

▼川村好郎氏(副理事長)は一月二十四日から能登半島を周遊、輪島・七尾・戸倉温泉で一泊、女気のないのが残念と二十七日に帰阪。「大阪のひとつらん

さいと雪が降り」

▼浜田久米雄氏還暦記念句会は一月十五日自宅で開催、柳友多数が祝福した。「男一匹還暦へまで辿り着き」

▼堺市市長室広報課編集発行の「広報堺」(二月一日発行)の「グループでゆこう」に堺の川柳家グループの活動が記事になり、南北・水府・路郎・葭乃・生々庵諸先生の句も掲載、十六万四千三百世帯に配布された。

▼藤井明朗氏(鳥取県同人)は十一月三日付で四十三年度、統計調査員の調査事務優良のため内閣総理大臣賞を受賞された。

▼石倉旅風氏(大和郡山市同人)は椎間板ヘルニアで入院加療されていたがこの程退院、大和郡山市小林町四一四で静養に専心、第三の人生への出発のため身体を鍛え直しておられる。

▼小西無鬼氏(兵庫同人)は昨年六月から地方紙に「川柳とは」と題し執筆、川柳のPRをやっておられる。昨年暮れで一応打ち切り、今年一月から「続川柳とは」を書いておられる。

▼弘津柳慶氏(出雲同人)は正月には入院中の夫人や、二人の令息も帰省して賑やかな一家となったが、六日からは、また、職場や学校やら再入院で父娘二人がらしの淋しい家となりまし

したと。

▼福田丁路氏(高槻同人)は一月十五日大阪空港を発って台湾へ。台北台中を廻り十八日に帰阪されたが、風光明媚、人情あつく、日本語で通じるので楽しこの上なようです。「台湾は大阪弁で用が足り」

▼清水一保氏(鳥取同人)は二月七日の町議選に第三期目の立候補、雪中を若さにものをいわせて東奔西走奮闘を続けておられる。柳友の声援百票にも優り

▼菊沢砂夫氏(小松園氏令兄)は一月四日心臓衰弱で死去、行年七十二才。謹悼一月十七日に死去された。▼東喜久堂氏は老衰のため八十三才。川柳雑誌社玉造支部時代に投句をされていた柳人。謹悼。

▼山田季賛氏(高槻市同人)は一月十日急行しやま号で鹿児島へ。十二日徳之島へ渡り東亜観光ホテルを拠点に、砂糖工場や太平洋戦争の頃の戦跡を見学、「大和沈んだ沖へ跡を手を合わせ」(一月二十一日には万博会場を見学、二月一日には奈良飛鳥生神社の天下の奇祭「おんだ祭」)を見

物。「お祭行事カメラファンをよろこばせ」

▼大江秋月氏(兵庫同人)は二月十日付で神戸駅から久下村駅長に栄転。一改革が始まり駅長転勤し一秋月。なお第二十一回国鉄文芸年度賞三等に入選された。

▼樹本路路氏(大阪同人)は有田市箕島電報電話局庶

務課長に。橋本幸男氏は近畿電気通信局第二建築部設備課監督へ共に栄転。

▼藤岡花梢・岩田美代さん(富田林市同人)の宅の近から出火、花梢さんの宅は塀の際まで火が迫ったが類焼はまがれた大由

▼金井文秋氏(大阪同人)の母堂が二月二日夜八十三歳の高齢で逝去。

▼阿万万氏の氏(大阪同人)の新住所は、大阪市天王寺区南河堀町六四。謹悼。

▼西出一栄さん(大阪同人)が心臓病で桃山市民病院へ、金井文秋氏の夫人は高血圧で警察病院へ——とも

に早いで全快を祈ります。

たのしさひろがる お買物

阪急

大阪梅田本店
千里阪急・神戸支店
東京大井店
数寄屋橋阪急



うしろを思う

高 鷲 亜 鈍

つらつら思う中味も黒焦げ
消ゴムでどうしようもない娘の臨月
水虫と酒のグビリグビリも梅雨期
家ダニがいるのか痒い肌衣更え
腹立てまい相手の立場を考えて
墨痕りんり筆も命も横に
貧と盲いやおうなしの時刻む
家の隅々まで口うるさくなつた
僕のことでも母子喧嘩はせんといて
妻は娘に娘は妻に押しつける無理いう重石
ひがまずに日々是好日でいられたら
赤い血も黒い血糊のする刃
齢は寄つても格好いい気のペレー帽
悲劇の主は泣かず笑わず
冬の河豚夏の鰻が欲しい舌
山麓のボロ家にも月着陸点が見えてくる
抵抗に詩を書くことのもどかしさ
墨をするだけ筆はそのまま
揺籃はむかし鉄板の上で寝る僕
生も死もトンネルでつながれる

裁かれるイエスへペテロは離れ去り
ペテロもパウロも主の悲しみを負けず負う
失明に吝な野郎となり果てる
胆っ玉が小さくなつたガムをかむ
庶民でも理解ができる詩が欲しい
言訳めくけど僕の小説書きたいなあ
遺伝などと承知できない癌と盲
自分でも分らない詩などもう書けぬ

月刊 川柳平安

清新で意欲的な編集と、遅刊のない確
実な発行で全国から高く評価されてい
る不偏不党の総合的な柳誌です。あな
たの川柳の良き伴侶としてぜひご購読
ください。

誌代 半年分 金五百円

(旧号見本贈呈)

604 京都市中京区姉小路通

柳馬場西入

平安川柳社

振替京都七六五番

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋

丹青堂

ちやんせいのり

▼川柳塔在阪参事・常任理事新年会は一月二
十七日(火)午後六時から北京料理大成閣で
開催。例年受付役の小谷葉子さんが所用のた
め欠席、多少華やかさを欠いたが、一三夫氏
が受付の代役で定刻前に庸佑、静馬、薫風
が出席、水客、形水、いさむ、白柳、没食子
菜、好郎の諸氏と生々庵、小石夫妻の顔が相
次いで見え、流感で二週間病臥の生々庵主幹
を案ずる言葉があちこちで交わされ、主幹を
中心に今年も盛り上がりを見せる川柳塔の気
運が早くも察しられた。没食子氏の乾杯の音
頭でおめでとうを交わし、白柳氏の閉会の
辞、川柳塔万歳三唱で閉会に至るまで、豪華
な料理のコースとともに和の雰囲気は室に漲
った。散会九時。(薫風)

本社 二月句会

会場 以和貴莊
六日 午後六時

会場受けの机上に、故後藤梅志氏の句集が高く積まれている。この句集を見ずして逝った梅志氏がお気の毒でならない。

席題は「梅」「志」「房」と氏のネームにちなんだものばかりである。

白柳氏の柳話のなかに、この句集の推進力である中尾漢介と薫風氏が、逝去の二日前にゲラ刷りを梅志さんに見せた——と。

あの強気一本の梅志さんが、うんうんとうなずいていたことは、せめてものの救いであつた。

白柳氏寄贈の供養の栗おこしが出席者におくられ、長女明子さんと令孫の慎太郎くんが謝辞をのべられた。

月間賞は熱の人、竹中肖二氏が見事獲得された。

(河井庸佑整理)

出席—薫風・与呂志・双葉・大吉・新之助・一峯・一舟・柳宏子・水客・季荘・柳志・一三夫・千万子・冬二・一治・鳥荘・言也・鶴声・万的・肖二・綾女・維久子・一二三・いさむ・滋雀・白柳・作二郎・圭井堂・静馬・瓢太・勝晴・雄峯・花梢・トメ子・紫香・

金三・好郎・柳太・喜風・鬼遊・凡九郎・誓静歩・葛城・醉々・虎声・修史・之保・葉子

席題「梅」

阿部 柳太選

さきかけて浄土に一輪梅が咲き
霜柱ごときに寒梅負けていず
梅便り幹事そろそろ案をねり
梅漬ける紫蘇の匂いに母がいる
立ち退きに梅も悲しい色で咲き
梅一輪咲いたとしるす閑病記
たえしのお事をおしえてくれた梅
庭の梅貫めて金借る部屋に待ち
梅干しを漬ける技術も母ゆずり
バスで来た梅見で風邪をひいてくる
底冷えに老妻も手を出す梅見酒
車窓まで梅が匂うてくる小駅
梅の花受験の母娘目に入らず
食欲が粥と梅干とはあわれ
鉢の梅散って閑病まだつづき
亡き母が遺した梅の漬け加減
浪人も梅の紋菓子頂戴し
梅咲いてよしずの茶屋も生き返り
梅一輪ほころぶ奈良にお水取り
梅林の日向を撰って松葉杖
こぼれ梅のみやげに酔うた妻の留守
梅干の壺に泌みこむ苦労性
峠から離れた家に梅の咲く
梅の宿モンペ娘に酌をさせ
手術廊下に梅が匂ってくるゆとり
ワイワイと梅を見にくくピクニック
梅の香を送れぬものかと老母の文

新之助 柳宏子 凡吉 水客 一二三 一舟 花梢 滋雀 庸佑 白柳 静馬 言也 圭井堂 柳志 柳宏子 トメ子 醉々 誓二 言也 葛城 花梢 紫香 大吉 作二郎 勝晴 千梢

白梅の下に美人が居る南面
観梅の広告なんとなく暖か
開発に今年かきりを匂う梅
都会人梅のにおいを忘れかけ
離農する夫婦に梅が笑いか
枯れてない証しをみせて梅の花
旅慣れた梅の見頃を見逃がさず
絵になれば梅はちよっぴり咲き見せ

席題「志」

岡橋 宣介選

大志いま途方に暮れてる上野駅
ママより強いパパになりたい志
志を曲げず予備校通いまだつづ
志 大阪 駅は人の波
好きな人出来て大志にひびが入り
青春の大志は二世へ引継がれ
志と違つて出世してしま
薄志と書いて金高見えるように置き
志を横丁で透して見
立志伝ばやけたとこがひとつあり
立志伝松下さんは書かされる
志望校すべてゴッゴ踊つて
がむしやに働きたい志はあ
志ならず移民の人とならず
志をきかずされてる第三期
志素直僧侶の衣の白さ
志とは女に見せてやる梅だ
志遂げたるごとく花が咲き
ジレンマのペン愛と書く大志と書く
歌手志望上京したがそれっ切り
トランクの底に寝ている志

静馬 一二三 静馬 維久子 鬼遊 雄峯 柳太 静歩 肖二 儀一 千梢 花梢 千万子 与呂志 作二郎 薫風 冬二 好郎 宣介

席題「房」

橋本 言也選

行司の目房をしごいた腰構え
位牌持つかよい房がゆれてる
房にさえりズム白山太鼓打つ
腰紐の房を垂らした支那美人
鳩翔って土鈴の房は今日鳴らず
階級といふ軍配に房が付き
還歴に髪房々と夢を持ち
房々とした長髪のコマーシャル
房結ぶ内職というかぼそい手
房々とたばねた髪はかづらなり
中華店飾る灯籠に五色房
球歴を房にも見せた優勝旗
温室のバナナ房々腐りかけ
房のある襖の部屋に寝かされる
宝物の軍扇緋房褪せていず
色ざめた簞笥の房だそれでよし
果樹園主出来のよい房もいで呉れ
被布の房ゆれて乙女の羽根をつく
逝つた子の帽子の房が重くある
背にのふとんだいこの房のゆれ
河内野に住みつきの葡萄の房豊か
一房のブドウが重い騙されて
帯の房にも齡をかくす色
掛軸の房も旧家としての色
まん幕を房はめでたくつり上げる
泣き止めば乳房ささとりあげる
裏町の色に簞笥の房も褪せ
ひからびた乳房それでもしがみつ
房取れた儘で嬉しい幕を張り
紫の房あざやかに勝ち力士

滋雀 千万子 万的 肖二 勝二 圭井 柳太 白柳 トメ 双楽 好郎 水客 柳宏子 烏莊 金三 綾女 冬二 千万子 醉々 冬二 好郎 万的 庸佑 瓢太 鶴声 一三夫

幕の房結び目出度い朝を掃く
滴する乳房で岩に海女憩う

兼題「指切り」

児島 与呂志選

うんうんと指切りしてるバーの隅
指切りを信じ屈託ないイビキ
指切りをして友情にヒビがいり
指切りをしてから嘘が楽に言え
指切りの嘘を見抜いた小指
指切りの子を裏切った梯子酒
指切りをす子へ寺の鐘が鳴り
夕焼けがきれい指切りして別れ
指切りの小指に恋の火を感じ
指切りはしたが断わる電話口
指切りも営業ですと夜の蝶
指切りを子どもきつちり憶えとり
指切りをしてから嘘を考える
指切りを信じるわが子へ土産買
指切りをして安心の児は寝入る
指切りで足らず輪ゴムを嵌められる
指切りに子供の夢をあためる
母さんが呼んでる指切りして別れ
指切りをしてブランコの順を待ち
指切りの二人へうれしい明日があり
指切りで可愛い秘密守られ
病んでいる子へ指切りがたまなるなり
あわれ嘘の指切りだった母の死

滋雀 言也 どんたく 扇水 扇水 滋雀 柳宏子 喜風 柳志 柳宏子 双楽 誓二 庸佑 虎声 白柳 静馬 花梢 肖二 好郎 醉々 冬二 与呂志 本多 柳志選 祥月 扇水 栄

兼題「押入れ」

本多 柳志選

押入れが邪魔をしている四畳半
押入れを四角に生かす妻の知恵
押入れにこの家の気風伺われ

祥月 扇水 栄

押入れで育ったねずみあはれ出し
押入れの隅で鈴虫夏を待ち
押入れにかくれていつか寝てしま
押入れには異状がないと捜査班
押入れの深さに明治まだ残り
俺の休みに押入かき回す妻
押入れの餅に正月まだ残り
押入れが隣の声を断つ団地
押入れへ隠れん坊が寝てしま
押入れの場所が自慢の設計図
押入れの中まで福の豆をまき
押入れの物に再婚迷わされ
内職の手は押入れに届く位置
愛人が来て押入れに風を入れる
押入れのない設計を笑われる
押入れの位置でもめてるマイホーム
押入れの隅から内緒内緒の絵
押入れも簞笥も舞台の風にゆれ
押入れは妻の未練が吹き溜まり
押入れでも新婚らしい色と成り
押入れで若いツバメがちぢこまり
押入れで乏しい暮しのぞかれる
押入れへわが子の無理を閉じ込める
押入れもくらしの恥部はかくされず

兼題「妥協」

黒川 紫香選

口手下の怒声が妥協線を引く
妥協せぬ足靴ずれになやませ
お互いに疲れが見えてきた妥協
妥協無き一線にきて腰を据え
本当の妥協は肚割って話し

扇水 一栄 祥月 どんたく いさむ

再会の妥協男は酒にする
 首切りを無視合併の妥協案
 妥協する腹で来たのにどなり立て
 妥協して帰れば家の灯が明い
 この妥協どちらも勝つたつもりなり
 妥協するハラと見ぬいた電話口
 反対も妥協も予定の内にあり
 妥協するつもり膝を押えられ
 妥協した方が得とは知りながら
 敗北でない妥協して帰る
 一応は妥協しておく下心
 また一人友を失くした日の妥協
 割切って話せば妥協の線に触れ
 妥協点相談したら皆違ひ
 妥協して出た税務署をふり返り
 妥協したがじわじわ怒りこみあげる
 妥協することになってる膳が待ち
 妥協する心になって炭をつぐ
 妥協点やつと見だした午前五時
 折れ合いをしてもせんでも金が要り
 前例がないと役所は妥協せず
 汐時と見てか妥協へ歩みより
 妥協して夜の時雨を聞いている
 妥協する腹へ妥協してこられ
 妥協なき部屋に灰皿ひとつあり
 妥協してくむ盃で又こじれ
 妥協していきなり握手求められ

兼題「デザイン」 正本 水客選
 デザインに整形手術欲しくなり 葵 水

デザインにお任せします肥満型
 デザイン帳だけで前金取ってくる
 デザインに惚れたが仇でしまいこみ
 デザイン炸烈地下街の青春譜
 デザイナーの目に風紋の美しさ
 デザインを変えて目段もつりあげる
 デザインを調和と進歩の意義をもち
 デザインの奇抜若さにカバーされ
 デザインを変えた当座は少し売れ
 デザインはどうです値頃の春を着る
 斬新なデザインモデルも不安なり
 万博の落穂を拾うデザイナー
 商魂はデザインすれば真似る
 デザインが泣くほどヒップ大きすぎ
 デザインを褒めてセイルス値引き
 デザインに命をかける截ばさみ
 でたらめに変えたデザイナー人目引き
 デザイン賞其後は鳴かず飛ばずなり
 デザインに見る万博のお国柄
 折れ折れクレパスでデザイン出来上
 デザインが間の抜けたよな新五百円
 はがゆても老舗デザイン真似られず
 バスト切りヒップを強調した缺
 悪くないデザイナーやがと気に入ら
 案外地味にコンピュータが出でる
 駆け上る女デザイナーからこぼれ
 水着ショーもうデザイナーの余地が
 デザインがいいなと褒めたことに

★
 デザインがいいなと褒めたことに

一 葵 水
 二 新之助
 三 勝 晴
 四 静 歩
 五 柳 志
 六 柳 三
 七 綾 女
 八 好 郎
 九 滋 雀
 十 与 志
 十一 柳 志
 十二 柳 宏
 十三 勝 晴
 十四 いさむ
 十五 千 子
 十六 儀 一
 十七 静 馬
 十八 言 也
 十九 千 也
 二十 葛 城
 二十一 一 舟
 二十二 一 三
 二十三 雄 夫
 二十四 雄 峰
 二十五 万 的
 二十六 作 二
 二十七 肖 二
 二十八 水 客

▼大萬川柳大会は二月二十二日に開催され
 が出席六十一名、投句約四十名の盛会。

東洋樹川柳贈呈

川柳大会

日時 四月十二日(日) 十二時

会場 海洋会館

神戸市生田区中山手通三丁目八六
(国鉄元町駅上る二〇〇米)

兼題

「時」

(京都) 北川絢一朗選

「染まる」

(大阪) 中島生々庵選

「旗」

(神戸) 鈴木 九葉選

「外人」

(大阪) 近江 砂人選

「風」

(神戸) 三条東洋樹選

講演

「これからの川柳」

受賞者・(新津) 大野 風 柳

会費 二二〇円

主催 時の川柳社

各地柳會

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳會

西出一栄報

逃げ腰をねらい代表もつくる 富久一
逃げ腰で振るゲバ棒が宙を切り 一舟
逃げ腰で云えば意外によい返事 誓二
逃げ腰の妻へ未来の夢を説き 綾女
金の要る話になって師走の空つ風 遊
身の程を知って端役を得意とし 鬼歩
聖徳太子とみてお得意へさからわず 千里
汐時と見てお得意の黒田節 弘生
得意満面当選アツプで写される 竹青
犬の仲間までお得意に頼まれる 金三
乗せられていても知らず得意がり 古方
慢性の叱言も親がまめなうち 芳子
またかいな老母の繰言聞き流す 形水
美人に囲まれていて失った美意識 静馬
慢性と見られズルズル通わされ 白柳
ちっけな国土に慢性過疎過密 滋雀
慢性の阿呆と夜の灯にからかわれ 章雅
反対であった嫁御に看とられる 六龍子
反対とはつきり云えずよくばやき 葵水
反対とはつきり云えずよくばやき 秋

対策を立てて反対押すかまへ 貞山
反対は心に決めて口出さず 句念坊
泣いてても人形笑ったままの顔 あいき
定刻に来て反対の急先峰 双楽
反対反対自主性はもてず 凡九郎
盲腸と知らず温めていた不覚 一栄
憎まれ口云うて女は愛を秘め 智子
反対が娘の恋心かきたてる 肖二
成功は反対された意地が効き 正朗
只一人反対のどが乾ききり 柳宏子

○ 桃色の耳へささやく甘い恋
丸い人どこか欠けるとこもあり
指丸めかけたら駄目と母の声 好一
通学の踏切りまでと送るママ 一舟
踏切りの風が冷い恋に耐え 伸吾
遮断器を下ろして警手タバコにし 鶴声
踏切りのとこまで保母として送り 秋
縄張ったとこで野次馬あきらめる 小路
ふる里に旧知を訪えば縄をない 竹青
縄をなう夜は出稼ぎの夫想う 滋雀
縄張り乱れての票集め 心月
ようもまあ御無事で縄も疲れた荷 凡九郎
ボケットの日銭を誘う縄ノレン 章雅
縄ノレン不遇な影がつきまとい 六龍子
せめてもの情願の手をかばい 誓二
棕櫚縄を使い日曜手を荒らす 肖二
荷造りの縄へ差出す錆庖丁 金三
縄編機どうにも心細い縄 古方
会長は何処へ締めくくりがつかず 富久一
締めくくり和尚の世話になってゆき 正朗

締めくくり上手な姑に教えられ 芳子
締めくくり顔をしてよう儲け 静馬
締めくくり出来ず若干春によう 句念坊
締めくくるつもりが一層火の手あげ 柳宏子
司会馴れ締めくくりだけ忘れない 白柳
締めくくる花道がない幕下りる 鬼遊
締めくくりお師匠さんが音頭とる 形水
締めくくりその日その日へ掌を合せ 静歩

南大阪川柳會 金井文秋報
諫言をする友達が先に泣き 小松園
さりげなく部下のエラーを庇てやり 滋雀
チョンガーでよかつた好きにならん人 一栄
特別に好きにもなれず友白髪 一舟
新婚がもうチョンガーへ威張り出し 柳宏子
特別と云うからえんかいなと思ひ 千梢
歌麿の腰に不安を感じない 古方
友情のかけらも見せず執達吏 綾女
狂人にエラーなどなし陽に当り 柳青
チョンガーに雨のネオンが眩しすぎ 白柳
少年の目にエラー凄く突刺さり 葵水
チョンガーにわかるものかと負せも 好一郎
振り上げる手に友情の涙あり 好風
チョンガーの気楽さ齡をつい忘れ 喜風
九分九厘かえらぬ金を友に貸し 大吉
特別にせんといてやと大旦那 誓二
エラーからエラーへ人生たそがれ 静歩
スベッシュルームで鳴にされて居る 形水
若き日のエラーも交えてする訓示 新之助
腰据えてやれる仕事のない不幸 文秋
腰の低い人が社長と後で知り 一二三
腰弁の重く人生峠越し 君子

腰申しカンナ休めてゐる大工
チョンガーを嘲けるような世帯持ち
支払いの迫る約手にノイローゼ
不意に来てマダム居間で飲める仲
買うと見て腰をあげたら客は去に
友情の判が女房の氣に入らず
新妻のエア可愛いものに見え
エラした孤独かばんの重い帰路
特別鑑定易者と対坐する個室
腰据えて借金取りははざとる氣
齒から眼にどうやら腰にきた齡
親方は日の丸なんだ腰をすえ
腰痛に寄る年波をかみしめる

○

逃げ足で善意の少女名も告げず
喜んでもらう多忙を嬉しがり
選挙戦終ればサツへ呼び出され
その日までそつと秘めもブレゼント
十二月足のやり場もない疲れ
顔見せぬあれも役者だ馬の足
足しげく通うた得意逃がされず
店員に知らせたくない行詰り
云いたい事云うたら何も彼も終り
うつぶんを波に叫んでみる独り
悔いのない一年だった鐘を聞く
一日が終り家計簿と睨み合ひ
憎い程心をのぞくブレゼント
行き詰る話は聞いてくれただけ
足音をたてて近づく思いやり
波かぶる人間不信の声でなし
振出しにもどつたところで終りそう

鶴声 金三 儀代 静馬 小路 あいき 瑞枝 章雅 虎城 肖郎 喜仙 静馬 好郎 柳志 白秋 文柳 好一 舟一 金三 天笑 滋雀 喜風 智子 花梢 儀一 新之助 静歩 古方

終いまで聞かず嫉妬の一途なり
あの娘もう居ない酒場へ足がむく
踏張って見たけどやはり試歩の足
北風へ足踏みしながら待つ開店
ブレゼントよりよい言葉が欲しい老母
長い夢でしたポストを振り向かず
波もないのに空缶が岩に鳴る
ローソクの終りのように燃えた恋
荒波に揉まれ流木丸うになり
つきあひも仕事のうちにして多忙
年頃の店員にきくブレゼント
ブレゼント嫌でも貰う義理があり
ブレゼントうぬばれないでと突返し
嫉妬の皺寄せ猫逃げてしまひ

備前川柳社句会

目賀芳月報

ご気嫌は斜めと秘書は目で知らせ
母ちゃん飲むな飲むなと目で合図
黙禱へ薄目をあけたのも混り
點で見るように見えても作家の目
目頭をソッとおさえた悪女ぶり
目の悪い祖母が近頃ひがみだし
目をつむることを覚えた五十代
変わる世の嫁のしぐさに目をつむり
通知簿へ教育ママの目に涙
正確な目測くもは網を張り
神棚に片眼のダルマが春を待ち
まだ黒い内は許さぬ隠居の目
目で知らずサインの意味がまだ解
会合の悪さ多数決にもならず
目の前でミニ大胆なポーズする

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

大吉 誓二 君声 千代 葵水 虎城 瑞枝 小栄 一路 喜仙 章雅 八郎

一声 柳子 秋月 万女 清春 伊久野 正州 飴ん坊 芳月 胡明 淨美 草二 幸仙 久米雄

科学者の非情は月に孔をあけ
護衛つきでやって来ました月の石
光ってる月とは見えぬ月の石
みかん狩土産の方が高つつき
ふるさとのみかんはもつと甘かった
お歳暮のみかん暮れから腐りかけ
炊飯器の調子も鍵っ子教えられ
前借りのかせを直せと説教し

こまつ柳壇

山上千太郎報

新築の木の香へ謡しみてゆき
ご馳走になる棟上げの綱をもち
新築の床の間明るく花を活け
新築の天井仰ぎ畳なで
若い氣で正座を避ける忘年会
忘年会又一つ氣が若くなり
仏像の右手真偽をのたまわず
眼の色が本物と知り身構える
本物とみわけもつかず酔いまわり
仲間はずれ手すりに雲の流れ見る
紅一点仲間に入れて盛り返し
仲間でも口論の出る選挙熱
結局は打算がからむ仲間割れ
床の間に一升びんの並ぶ会
特売へ二階が落ちるかと思ひ
帽子ふり手をあげ天皇さま人気
和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報
コーヒーも冷えて茶房で妥協する
父かなし茶房で野球見て帰る
サンプルケース茶房明るいひとと
情報ににぎる末席顔をあげ
ニュースのつもり結局ドラマ見る

草論 夏生 史葉 落児 没食子 竹莊 甘草 城南 芳朗 松水 柳路 苔泉 茶仏 弘実 六右 みさ 香徑 清枝 七三郎 魚山 千太郎 太茂津 淳子 公作 智恵女 智水庵

禁煙でなかつたのかとがめられ
 這う紫煙嫌がる妻の後を追う
 聞き役の煙草も興奮した手つき
 聲声と共に煙草に火をつける
 俸せの頂上過ぎてからわかり
 頂上に登り下界はうめく蟻
 頂上はあきらめたらし家族づれ
 机上まだ昨日の煙草あつて留守
 ただ好きなだけととほけてはしい妻
 あすなる川柳会
 山本素郎報
 はすかに読んでも要点は掴みどり
 待たされ趣味がおんなじ応接間
 無理強いしてまで酒を注ぎたがり
 病床の直感看護を戸惑わせ
 無理に無理重ねとかく生きて来た
 そのたびに妻の図星に刺されて居
 ライバルの顔をくらしの中におく
 好郎
 南海電鉄川柳会（大阪市） 辻圭水報
 コインロッカー通学服を娘が着換え
 物騒なコインロッカーそとと開け
 商売人らしうコインロッカー利用
 コインロッカー生かし旅から旅の宿
 コインロッカー手軽になつて御兩人
 コインロッカー親も知らないも預け
 富柳会（富田林市） 阿部柳太報
 電光石火美人の横へ席をとり
 爪染めた美人の苦勞きいてやる
 「美人やなあ」とうきも障子越
 世は無情富士子に生れていればなあ
 八方美人しんから熱も上げられず
 うち孫は美人だつせと姑じまん
 菊代
 生 長
 之 保
 雄 峯
 弥 生
 孝 子
 草 葉
 白 柳
 好 郎
 惠 美子
 青 香
 瓢 酒
 風 太
 素 郎
 好 郎
 句 念坊
 清 涼
 宏 二
 葉 八
 郎 水
 笑 痴
 き はち
 德 二
 葉 八
 郎 水

アルバムの明治の美人今ここに
 パーティに美しい妻連れやにさがり
 共稼ぎ美人の妻で落着かず
 美しい義母へ娘は嫉妬する
 思いをかけた美人こちらを向かぬ
 あれほどの美人の妻になぜ浮気
 人形も美人の方が先に売れ
 整形外科美人に成ると書いてなし
 美人におなりまだもつともと鏡
 奥さんが美人で主人おぼえられ
 美人だと思ひこむほど筆達者
 美人にはちと親切な聴診器
 美人の対決裸になってから決まり
 社長室の美人月賦の洋服屋
 美人握っているからわざと目をそも
 新宿とミナミの美人ちと違い
 現実には生きる素顔の美にみとれ
 京美人ミニは内股で履いてはる
 ゼニ出したわりにゼニにならない
 屋台の灯落して寡婦が読む小銭
 堺・若芽合同句会(堺市) 吉岡青報

人妻だからただ花束を投げただけ
 真心に水引かけでおくられる
 コンピューター贈り物まで世話をする
 茂美

アサ
志寿
弥栄子
花梢
郁久子
東雲楼
凡吉
吉太郎
宏子
香豊
摩太郎
金三
柳太
好柳
美代
尚史
静馬
六竜子
夢成
千万里
茂美

親切にしたのに冷めたい人にされ
 禪寺の廊下の冷えも悟るもの
 当番は冷めたいなどと言うとれず
 友情のある日冷めたい言葉じり
 プラトニックはつめたい愛と知ま
 老いの坂また駄足で暮れかかる
 駄足で帰リチャンネルうばい合う
 駄足に息切れのする老の坂
 夢に出て駄足で去った子の影
 宣伝機師走の空を駄け廻り
 孫達と駄足競ううららかさ
 駄け足を次の車にやめて待ち
 人の気も知らず窓口昼休み
 窓口で済む用件は高が知れ
 窓口の生花に順番待つゆとり
 窓口は親し借るには程遠し
 時間ですとも云わず窓口閉めただけ
 安上がり喜びもつかの間手をぬかれ
 手をぬいたとこが気になる夜の膳
 見習いのうちから手抜き教えられ
 手ぬいたばかりに二度手間夜なべ
 入札の無理を今更云う手ぬけ
 手抜きしたとこへ風が道をつけ
 床下の手抜きささし音がする

徳痴
笑月
流月
つき子
藻介
欽正
柳信
象園
春子
美代
志寿
清涼
筑前
静馬
遊仙
好郎
敬三
摩天郎
天笑
草春
青柳
白柳

川柳ワイロー社(ハワイ)

飛んできてよかった母は口をきき
 小鳥さえ明日への希望かけて飛び
 故郷へ誘う雲ありゼット飛び
 乱れ飛ぶデマにも負けず愛に生き
 孫の手をかりて飛越す水溜り
 年男飛び上っては豆を撒き
 一と飛びで月まで行くも夢でなし
 火打石藏れを払う塩をまく
 初夢の縁起かついで苦勞する
 連磨の眼二つ揃うて得意顔
 何となくかつ縁起は親ゆずり
 吉日にこだわり過ぎて機を逸し
 神前へ縁起を願う初詣で
 塩まけばそれで気のすむ祖母だった
 川柳 大阪(大阪市) 児島与呂志報

通動車スケスケルックと向い合い
 三才児廻らぬ舌で吐く氣迫
 女上位が嵩じて今は主人変え
 へそくった金を妻にへそくられ
 今頃になって市電が便利だと
 子供等に寄る年波と云われたし
 云い訳の夫の嘘は堂に入り
 小父さんと呼ばれあそぼうと思ふ齡

三石
曉舟
浮草
魔花麗
拝山
雪女
泉水
河舟
紅溪
快夢起
カラコ
北海
万里歩
峯円
三十四
我勝
秀峰
徳松
漁人
一歩
喜醉
洛醉

句会 往来

玉造川柳会(大阪市)
 時 三月十日(火)午後六時
 題 開幕・外人・古い
 所 玉造交差点南一〇〇米
 大阪信用金庫

堺・若芽合同川柳会
 時 三月十三日 午後六時
 題 地図・付添い・テスト
 所 八木摩太郎居

南海川柳会
 時 三月十九日 午後六時
 題 裏通り・耳障り・
 がらくた
 所 ナンバ高架下
 親和クラブ

南大阪川柳会
 時 三月二十日(金) 午後六時
 題 世間・持味・手応え
 所 アベノ松崎町二丁目
 以和貴莊

月へ行けるに地球にある地震
 良い悪い生れた時は知らなんだ
 もの思う孤独もほしい人々
 悪妻は禁欲生活続けさせ
 ほろ酔いの小唄目出度い折をさげ
 うるさいと云われる人がいて薬
 一人かと思えばやっぱり男居り
 忘却の中へ捨てゆく貧しさよ
 勝つための契約書へまた迂闊
 仁丹の香り好意の中にあり
 災厄は予告なしでもやって来る
 人情を忘れた世相のにらみ合い
 人情に義理がからんで出来た仲
 ステレオのように雷里に鳴る
 ラッキーな運刻上役まだ来ない
 死を見つめる時夜は孤独なり
 川柳まばたき 出原敬一報

望 敬 一 千代子 康明 文子 静夫 妻子 草加 清子 望 初美 松

童心にかえり故郷の盆おどり
 川柳塔松江支部 祥月報
 世間出ておしやべりが過ぎ婚期去り
 じつと堪え肝心なところで咳が出る
 欠勤の嘘へもっともらしい咳
 渡る世間につき回って運不運
 咳ばらいしめしあわせていた合図
 埃の埃かぶつてアポロ帰って来
 注射すむまで咳を耐えてた
 敷居またげば男世間へ体当り
 政治の埃り日本は神が吸うばかり
 砂埃蹴って一直線に踏む愛車
 祥月

○

体調も恋もコーチに管理され
 反対の立場子等にもある理屈
 反対の若さに明治小さく生き
 体調のよさにまかせた勇み足
 挙げた手に困る反対ひとりなり
 安反対徳球の声沼さんの声
 紅き実の色づき柿に百舌さわぐ
 色づきし田圃一面黄金色
 これほどに効く日言と知らず言
 冗談が出る日の父は酒が足り
 山紅く色づき冬か雲走る
 菊の香に弔詞読む声やふるえ
 アメリカまで届きそうな声で大漁話
 全山色づくもみじもみじに集う人
 駒つなぎ 岸南柳報

木枯しの柿はゆれてる二つ三つ
 木枯と一緒に消えたわが思い
 市南柳 子

木枯の中を利子だけ持ってゆき
 木枯の中に夢持つ宝くじ
 云いわけして犬の分買うプリのあら
 子がなくて受賞の犬も吾も老い
 除夜の鐘今年は野犬となつて聞き
 思春期の飼犬三日も家を空け
 餌元を放れて犬も拾い喰い
 飼主に似てスピッツのにくらしさ
 マイホームリングの箱で犬不服
 血統証見せて生れた子が売れる
 名犬が海を渡っておこし入れ
 顔色を見る愛犬のうとましく
 誰にでも尾っぽを振って叱られる
 失意の日と見てか犬さえ寄りつかず
 ウィンドーなせて木枯通りすぎ
 光好陽子報

電電岡山川柳同好会

二日酔したから悪い酒にする
 再婚の話に若さともし
 盲判ばかり押してる二日酔
 夕映えへ明日への希望語りかけ
 老婆の希望もう一人孫がほし
 ゴーゴーを踊る若さで人気者
 二日酔飲んでまわった店かぞえ
 冒険にいでむ若さをうらやまれ
 若さです全学連は今日もデモ
 お若いですネに女心がふと迷い
 二日酔妻の視線がつきささり
 ままごとが上手にまねてる二日酔
 ふじかけ短詩会 藤本礎山報

おとなしい静かな姉は母ゆずり
 美弥

三国語話せ笑わぬお手伝い 佐知子
元旦の病床日記忘れとこ 良枝
無理やりに咲かせた花と蟻知らず 恵子
心までけがすな白い菊が咲く 和宏

こまで小中学生

夕立に肌まで濡れて二番風邪 阿也女
初恋であつた子等に言える幸 泰嗣
囲むから尚お見たくなる人の性 一稔
特選の裸像羞恥のあるごとく 勝久
又今日もやり込められた子の育ち 和久
顔色にかくこの程がうかがわれ 佳女
このままに病臥さすには惜しい父 鎮也
パパとなる記念にふやす預金帳 葉舟
シュカールの中で札束とけてゆき 征山
老いの身を靖国の子に養なわれ 忠志
百二十四代が絶えず国主たり 礎山

○

父祝う嬉しさからい酒もなめ 佐知子
祝いの日鼻唄も出る台所 末子
祝われる父より祝う人が酔い 喬
ライバルに優勝祝を讃えられ 敏彦
祝われた嬉しさじつとかみしめる 万里
祝われた母の苦勞もねぎらわれ 婦美子
お祝いへ樟脳くさい人が寄り 恵子
市場籠小康祝う鯛が跳ね 和宏

こまで小中学生

生き抜いた米寿を祝う唄が出る 慎利子
黒田節程に祝いの酒を飲み 吉春
お祝いへ義理を果した顔も居り 一稔
祝盃へ膝を揃えて芽出たがり 泰嗣
祝われて皆お蔭様おかげ様 喜久子

還暦が若い気分をうちこわれ 忠志
祝日へ日の丸の旗忘れられ 葉舟
祝われた日本一のいい笑顔 すみこ
さんご婚金銀結んで祝われる 佳女
父ひとり居らぬ祝いに酔いきれず 征山
小康を祝った鯛の目が見つめ 和久
寿の文字大書して娘が嫁ぎ 礎山
祝われて妻に感謝の頬が濡れ 山

城北明朗句会

川口弘生報

宝石ものびた爪には落付けず 進
生甲斐は乳の匂いの爪を切り 為二
気にかかる小指の爪の使いみち 満津子
かみさんの多忙はマニキュアは 弘生
壁向いて爪切る女の身だしなみ 風仙洞
爪切って指十本の有難さ 濁水
洗濯は亭主にさせて赤い爪 生仏
赤い爪近所に話題まきちらし 三十四
爪赤く染めて堅気の親を持ち 多幸
レジャーブルーム留守番ばかり頼ま ひさ絵
カーブームカラーブルームで月賦攻め 芳人
豆腐屋が自動車で来る時代なり 隼
諸々の煩惱あつて長命し 登
食欲の秋と戦ふふとり過ぎ 繁子
離婚とは知らぬ赤子はよく育ち 馬頭
大声の割に涙の出ぬ子供 加太
我ながら音痴で踊習いだし 春果

「はい」と云う古い女で妻は良し 雅万
秋風をミニで耐えてる脚線美 弘生
阿波踊女の派手な裾さばき 風仙洞
女もう寛美をはめる齡となり 為二

節くれた指表彰台の寡婦 三十四
女には惜しい気性で嫁おくれ 満津子
妻美人夫に靴もみがかせる 生仏
女気のないさびしさは布団冷え 茶々坊
女の過去聞かないことにしておこう 多幸
あきれた女大生もゲバを振り 一登
女にも見おろされたくない虚栄 進
山登り紅一点は両手振り 富士
姫御前と云うた明治は遠くなり 贊平
つまみ食い女ふくれる悩みあり 濁水
男勝りと云われていても涙見せ 繁子
お婆さん私も女と口達者 秀村
女の子少々めかしてと願う親 志津
神様も気まぐれの縁この夫婦 行有
神様もねむたい頃に鈴が鳴り 隼人

★

遅刊おわび申し上げます。

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 34521104
夜間 06 44008

本社三月句会

日時 三月六日(金)午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

柳話 八木摩天郎
「白紙」 傍島静馬選
「文才」 阿万方的選
「ジレンマ」 戸田古久選
「焼け石」 若本多志久選
席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

4月の兼題 「艶新語」 「バジャマ」 「望遠鏡」

五月号発表表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選

―自選は四句以内―

集 近作柳構(10句) 北川春巢選

九輪抄(3句) 清水白柳選

課題吟(各題5句以内)

募 「横道」 藤井明朗選
「メ」 高橋操子選
「男」 田垣方太選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表表(4月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選

―自選は四句以内―

集 近作柳構(10句) 北川春巢選

九輪抄(3句) 清水白柳選

課題吟(各題5句以内)

「ウインク」 中村ゆきを選
「平凡」 岡村久志良選
「欲」 岩本雀踊子選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百八十円(送料六円)

半年分 千 百 円(送料共
一年分 二千百六十円(送料負担)

昭和四十五年二月二十五日印刷
昭和四十五年三月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集人 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一―三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

なんば橋本条
大阪・東京・京都



手あみには
あなただけの
世界がある



・ペンペン草・

★万博の月だから、なにか特集を考えたが、万博の川柳を作ってもしょうがないし、三月号は毎年女流作家

の特集をしてきたがこれでもいいアイデアが浮かばなかった。けっきょくなにもしなかったが「九輪抄」がこの月にオーブンしたことは意義がある。

★前号は弓彦氏、本号は梅志氏、次号は磯山氏と、悲しい記事がつづくー合掌。
★ゲラ刷りだけ見て逝去した梅志さんが可哀そうだ。あと一カ月生きていてもら

えたらなあ、断腸のおもいである。
★これまでに何回も追悼号を出し、追悼句会も手伝ってきたが、ぼくのザ・エンドの場合、どうなるのかと聞いたら、今のうちに追悼原稿を用意しページを組んでおけーと。

★元理事長、西尾葉氏が近く句集を出される。うちの人はむかしから、あまり出版というものに興味がないらしく？個人句集がすくない。これを機会にドシドシあとにつづいてほしいものである。
★ぼくの別の仕事で、よく

おしゃれの毛糸



スキー毛糸

製造元・倉敷紡績

発売元・藤井商店

★元理事長、西尾葉氏が近く句集を出される。うちの人はむかしから、あまり出版というものに興味がないらしく？個人句集がすくない。これを機会にドシドシあとにつづいてほしいものである。
★ぼくの別の仕事で、よく

漫才さんに会ったのが、第一線で活躍している人たちは、いずれも一言をもち感心させられることが多い。小田、栄子の夫婦コンビは茶の間の人気者だが、この組の魅力はなんといっても新作である。それだけに次ぎから次ぎへと新作をおぼえていかねばならないが、木村栄子さんの文盲は有名である。
★夫クンの小円さんが台本を朗読すると、それをテープにとって、栄子さんは必死になって耳からおぼえるのだ。新作の連続だけに毎日戦いである。
★川柳もこのコンビのように、必死になれば、かならずいい線までいくだろう。
★印相学の大家が、ぼくのハンコを見て、凶相が出ているという。正にズバリだが、ぼくは今日まで預金通帳を持ったことがない、たしかにハンコがわるい。
(不二田一三夫)



仲代達矢

明日のために
今日ものむ
ポプシン

シオノギ製薬

黒潮躍る

紀州路へ



▶白浜・新宮ゆき◀◀なんば発時刻>

急行きのくに2号…(毎日)……7時45分発

急行きのくに6号…(毎日)……12時51分発

急行きのくに11号…(毎日)……16時40分発

夜行直通列車…(毎日)……22時15分発

▶白浜ゆき◀◀なんば発時刻>

急行きのくに7号…(土曜)……13時13分発

●きのくに6号およびきのくに7号は座席指定席券を他の列車は座席整理券をなんば駅でそれぞれ1週間前から発売します

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車